

愉快犯女神によって転移先異世界で異端審問の危機に陥っている

駒由李

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現代日本から異世界転移することになり、直前に女神にお強請りしてスキル「サイキック」をもらった主人公。しかし彼は気付かなかつた、女神のしたり顔に—— 目覚めた先は異世界。ちよつと産業革命のイギリスを彷彿とさせるそこで出会った少年の前でスキルを披露したところ、彼に肩を掴まれた。とても真剣な顔で。「君、死ぬぞ。正確には殺される」 目覚めた国「ユヴェーラント」及び周辺諸国で広く信仰されているボトム教。この宗教の教祖である現人神一族は奇蹟を起こす。そして彼ら以外が起こす奇蹟は認められない—— 即ち、主人公は「異端」である。「あの女神絶対どつく」スキルを隠すことにながらも、ユヴェーラントはテロリストや盗賊などが跋扈するそこそこ物騒なところで——!?! 異世界(?) 転移ファンタジー。

小説家になろうより転載

2021.05.06 完結しました

目次

君、警戒心なすぎじゃない？	1
そんなのってあり？	6
そんなの聴いてない！	16
天使かな？	20
経歴詐称カツコカリ	24
異世界就活はじめます	30
マッドサイエンティストならぬマッド女彫り師	37
その日、主人公は思い出した	43
三流銀行行員くインテリヤクザ風味く	51
疑惑	60
インターロード	66
暗雲	71
蠢動	79
困惑	85
探索、探検、そして	90
真相、そして	96
めでたし、めでたし	101

君、警戒心なさすぎじゃない？

社畜歴5年。中々にブラックを極めているこの会社の資材部で新卒から働いている。その間に憶えたのは、たまの休みで読む漫画だ。たかが漫画と侮るなかれ。俺の実家は中々反動的で、今時漫画は絶対許さない、読むなら小説を読め、ただしライトノベルは許さない。そういう家だった。おまけに大学も実家通いだったから推して知るべし。

大学を卒業して東京の会社に勤務し。労働基準法で言えば俺の人權は無視されているが、それでも家にいた頃よりは遙かに自由だ。少なくともインターネット通販で堂々と本を買える。受け取りはサービス残業のために中々困難だが。

そんな中で、ハマったのは所謂超能力ものや異世界転生・転移ものの漫画たちだ。

超能力の方はテレポート、サイコメトリー、パイロキネシス——その中で一番憧れたのはサイコキネシスだ。

(自分の意思ひとつでどんな重たいものも動かせる。最高だ。この能力があったらあのクソ上司のツラを吹っ飛ばせるのに)

考えるのはそんなしょうもないことだ。まあ、実際にそんなことはできないのだけど。

異世界転生・転移は単純な願望が出ただけの話だ。ここではないどこかへ行きたい。大学生までは就職してどこかへ行きたいと願っていた。就職してからは、この会社以外のどこかへ行けるならどこへでもいいと思った。

まさか、偶々残業なしで帰宅できた日。お目当ての漫画が発売日だったから本屋へ向かったその帰り道。その願望が叶えられるとは思わなかったではないか。夜道、横断歩道を渡ろうとした俺に、トラックが突っ込んでくるなんて——

目覚めると、真っ白い空間にいた。

「ToC」

倒れていた俺はがばりと身を起こす。辺りを見渡した。白い、真っ

白い。漫画で言えば作画コストがまったくかからない状態だ。自分の身形と荷物を改める。服はスーツにメンズのスプリングコートそのままだが、荷物は何もない。鞆どころか財布もスマートフォンもない。ついでに買ってきたばかりの漫画もない。1番衝撃の事実を受け止めかねながらも、自身はそれよりシチュエーションに顎を添えた。

トラックが眼前に迫った記憶はある。しかし、そこからの記憶がない。今の自分は生きているのか死んでいるのかすらわからない。普通ならトラックにぶつかった痛みなどが残っているものではないか？　と思つた。そこで思い至つたのが、自分が異世界転生ではなく異世界転移をする可能性についてだ。漫画の読み過ぎ？　どうとでも言つてくれ。とにかくこのときの自分は異様にハイテンションだつた。上下の感覚すらなくなるほどの白い空間で、俺は拳を振り上げた。

「やい！　男神だか女神だかわからんけど！　俺をどうする気だ！」
『どうするつて、どうされたいですかあ？』

すると、どこからともなく柔らかな女性の声が出た。死角を取られた。そこに、ギリシャ神話の彫刻のように白い装束を纏つた、美貌の女性がいた。この世ならざる美しさだ。展開で言えば彼女が転生女神だろう。そう思いながらも自身は勢いよく手を上げた。小学校時代から質問するときの姿勢は「元気が良くてよろしい」と褒められていた。

「はい！　この様子だともしかしなくても俺、次は転生じゃなくて転移ですよ〜？」

『そうなりますね〜。私がうっかり死んだと思つて回収したらまだピンピン生きてたから〜』

やけに間延びする話し方をする女神だ。そんなことを思いながらも、自身は気になつていたことを訊く。

「この展開で言う俺、異世界に行くことになるんですよ？」

『そうなりますね〜。最近の流行りですし』

「あつ流行りとかあるんだ……じゃ、じゃあなにかスキルください！」

『スキル?』

女神は垂れ目を瞬く。それに焦れつたく俺は言った。

「ほら、異世界に転生する人間が何かしらスキルとか異能とか魔法とか持つてる場合あるでしょ。チート能力とか。転移する人間にも何かくれませんか」

『うーん、まあ、あげられなくはないんですけどお……いいんですかあ? 次、あなたが行くことになる世界は——』

そこで、ぴたりと女神は口を噤んだ。そしてにっこりと笑う。

『いいでしょう。それでどんなスキルが欲しいんです?』

「サイコキネシスでお願いします!」

元氣良く、俺は答えた。

「俺自身も宙に浮けるどころか、象でもトラックでも宙に浮かせられて且つ余裕な、そんなスキルが欲しいです!」

『あー、意外に無欲ですねえ。他の転生者・転移者さんはもつと無茶苦茶な注文つけてきますけど……まあ、ありじゃないですか。いいですよ』

「やったー!」

無邪気に喜ぶ俺。異世界転移するということは即ち社畜生活から解放されたことも意味する。ついでに締め付けのやたら厳しい実家からも。諸手を挙げて喜ぶ俺は、気付かなかった。

そんな俺を見て、意味深長に口元を綻ばせる女神に。

『さて、それでは早速行ってらっしゃい』

そう言つて、女神は空中で円を描く。すると、真っ黒い空間が見えた。よく見ると星空だ。どうやらこれから向かう異世界は今夜らしい。そう言えば俺がトラックに遭遇したときも夜だったしな。時間が連動しているのかも知れない。そう思いながらも、そう言えば、と俺は女神に問うた。

「そう言えば聴き忘れてたんですけど、この異世界ってどういう世界なんです? あらましただけでもざっと説明してもらえると嬉しいんですけど。女の子いっぱいヒヤッハーとかできます?」

『とりあえず男女比は普通ですね。恋愛観もあんまりあなたのいた世

界と変わらないんじゃないですか』

冷徹な声が俺のハーレム願望を萎縮させる。なんだ、その辺は同じなのか……そう思いながらも円の中に片脚を突っ込むと、女神は笑って言った。

『そうそう、これ以降は私は一切の責任を持ちませんので。あとの人生楽しんでくださいね〜』

そう言っただけで女神は俺の背中を押した。

真つ暗な夜空。星がきらめく。その中で、俺は——落ちていた。

「と、止まれ止まれ止まれーっ！」

必死で怒鳴る。否、怒鳴ろうとして、落ちていく中で舌が絡む。それでも意思は伝わったらしい。俺の体は緩やかに落下速度を下げ、地上に降りる頃にはたとんと地面を踏めた。ああよかった。グロテスクなミートソースにならずに済んだ。それはよかった。それはよかったのだが。

周囲は真つ暗。街灯もろくにない。その中で、ひとり、俺は立ちすくんだ。

「飯と仕事と住むところ、どうしよう……」

せめて英語が通じればいいのだが。仕事で培ったスキルを呟いていると、道の向こうからライトが照らされてくる。

それが所謂三輪トラックのライトだと気付いたのは、その車がだいぶ近くにきてからだ。窓から、誰かが顔を出してくる。

「おじさ……お兄さんどうしたの？　こんなところで」

英語だった。あるいは英語に近い言語か。少なくとも理解はできた。その人物の声は20代ほどだろうか。暗くてよく見えないが、彼も仕事だろうか。そう思っていると、「乗ってく？」とその人物は言った。

「ここから先に俺の取った宿があるからさ。困ってるなら連れて行くけど」

「あの、でも俺、今お金持ってなくて」

「じゃあ取引だ。俺の車洗ってくれる？　それ約束してくれたら宿代払ってあげるよ」

そう言つて、その人物は助手席を示す。俺はこれ以上断る気にもならず、厚意に甘えることにした。洗車なら社用車で慣れている。任せろ。そう思いながら、俺は三輪トラックの狭い助手席に乗り込む。

そこで気付いた。間近で見た人物は、雲を紡いだ真つ直ぐなショートボブ。触れたら溶けてしまいそうな白い肌。目はルビーを溶かしたよう。15才かそこらの、とてつもない美貌の少年だった。少年はハンドルを握ると、俺に人懐こく笑った。

「それじゃ行くかうか」

——俺は不安になつた。この少年、ひよつとして自分の美貌を自覚してないのか？ こんなに怪しい男をホイホイ車に乗せるのか？

異世界だとひよつとしてそこらの危機管理意識が違うのか？

俺はのちのち、自身の感覚が正しいことを知る。

ただ、その前に、ある衝撃的な事実を知ることになる——。

N e x t

そんなのってあり？

がしゅん、と音を立てて扉が閉まる。格子の入った小さい窓から、目つきの悪い男が俺たちを睨んだ。男が銃を持っていることを俺たちは知っていた。

「そこで大人しくしてろよ。メシは持ってきてやる」
そして足音が去った。

残されたのは、閉じこめられた俺と少年。荒れた倉庫らしく、ガラスの破片やらアスファルトの割れたものやらが転がっている。天井近くに、やはり格子の嵌った明かり取りの窓があった。

その中で、俺は言う。

「どうしてこうなった」

「ごめんね、俺のせいだわ」

少年——イノセント・ジェマーケッツはそう言いながら自らのポケットを漁っていた。

話は数時間前に遡る。

現代日本からこの恐らくファンタジーな異世界に転移したての俺は、金も住処も仕事もない。偶々昨夜は、気の良い少年に車で拾ってもらい、洗車を条件に同じ宿に泊まらせてもらえた。出してもらえたご飯はイタリア料理とドイツ料理を混ぜたようなものだった気がする。ドイツ風ポテトサラダとカルボナーラ。朝からこのメニューだったのでやや胃に凭れたが、これがこの世界の普通なのだろう。見たところ、自分以外に所謂アジア系の人種は宿の客に見当たらない。食堂で自分が悪目立ちしている自覚はあった。幸い服装——サラリーマンスーツ——に関しては特に何も言われなかったが……もしかしてファンタジーはファンタジーでもローファンタジーで、限りなく現実世界に近いところがあるのか？俺がそう疑念を抱きはじめてたところで食事が終わったので、代金代わりの洗車をする事になった。洗車道具は少年が宿から借りてきてくれて、あとは水道をホースで繋げてひたすらスポンジでゴシゴシ。ジャケッツは脱いだもののスーツが水で濡れることに気付いたが、まあファンタジー世界で服が

汚れるなど些細なことだろう。それに、少年だつてツナギの作業着だ。ダイヤモンドを彷彿とさせる美貌にそぐわぬブルーカラーだ。彼には貴族的なフリルのついた襟やシャツ、赤いリボンが似合うだろうに。そう思いながらもわしゃわしゃと車体を磨く。随分土汚れが目立った。俺は傍で見守っていた(あるいは車を持ち逃げされないように見張っていた)少年に問う。

「ねえ君、この車前に洗ったのいつ?」

「えー、いつだったかなあ……しよっちゆう土に塗れるところに行くからすぐ汚れるんだよね。土砂降りの中でも強行したりするし」

「愛車ならもう少し手入れしてあげなよ。うわこんなどころまで土が……」

俺が身を屈めてスポンジを擦った、そのときだった。

迸る銃声。テレビやアニメでしか聴いたことのないそれ。身を強張らせる俺に対して、少年はのんびりとしている。

「あー、またかあ」

「またつて……またつて、なに?」

「え? 君、この国の事情を知らないの? 見たところこの辺りの出身じゃなさそうではあったけど」

「ええつと、ちよつと事情があつて……とりあえずすつごい遠くから来たつてことだけわかつてもらえれば……」

「まあそれでいいや。んつとね、この国はちよつと事情があつて。簡単に言うるとテロリストと盗賊がそれぞれ横行してるんだよね。今のはどつちかなあ。できれば盗賊であつて欲しいんだけど」

「なんで」

どちらにせよ質が悪いことだけはわかる。スポンジを握りしめたまま身を屈める俺に、少年はけろりと言った。

「テロリストなら間違いなく俺狙いだからさ」

「はっ」

「——おい、いたぞー」

その言葉とほぼ同時に、ばらばらと人が集ってくる。共通しているのは男だらけということ。彼らが全員銃火器で武装していること。

なにより——その視線が、少年に集中しているということ。少年はしやがみ込んだままだ。平然としている。驚く俺の前で、囲んできた男のひとりが紙切れを片手に言った。

「いたな。情報の通りだ、ここの鉱山の近くの宿に泊まっていると聴いた」

「誰かなー情報漏らした奴」

「そんなのはどうでもいい。——参祖が一画の長男にして最年少ユヴェリア、イノセント・ジエマーケット。あとついでにその怪しい奴。ついてこい」

少年——イノセントとやらの肩書きが理解できなかった。さんそ？ ゆうぐえりーあ？ 頭にクエスチョンマークを浮かべながらも、銃口を突きつけられると否やは言えなかった。

そして今。男たちのアジトの倉庫で、自分たちは虜囚の身に陥っている。

どうしてこうなった、という自分の疑問に対して、イノセントは申し訳なさそうに頭を下げる。こちらの世界にも頭を下げるという習慣はあるらしい。そう思いながらも、俺は訊きたかった。

「そのさ、『さんそ』とか『ゆうぐえりーあ』とかって、なに？ 最年少とか言ってたから偉い肩書きかなにか？」

「えっ、それも知らないの？ マジで遠くから来たんだね……もしかしてアキツシマネ出身？ あの辺っばい見た目してるし」

「あー、多分、そういうことにしときたい」

名前の響きからして、恐らくそのアキツシマネとやらは日本に近いのだろう。「アキツシマ」は「蜻蛉洲」、つまり日本を表す。「シマネ」は恐らく「島根」。どちらにせよ日本を表す。今後出身を訊かれたらその国出身ということにしておこう。そう心に決めながら、改めてイノセントに問う。

「で、それらってなに？」

「うーんとね、参祖って言うのは、文字通り三つの祖。この国——ユヴェーラントの建立に関わった家柄が3つある。ひとつが王家、シユムツク家。ひとつが騎士団団長の家系、マグダレーナ家。そして、こ

の国を商売で発展させることに貢献した商家のジエマーケット家。俺はその最後の家の長男ってわけ」

「その割には、随分ラフに行動してるみたいだけど……」

実際、そのラフな少年にとっても気軽に車で拾われた。イノセントはからからと笑う。

「これは俺の主義というか行動指針みたいなもんだからそれは気にしないで。それでユヴェリーアって方だけど。これが問題でね。たぶん、今回俺を……失敬、俺たちを攫ったテロリストはそっちが目当てじゃないかなあ」

「それって……?」

「まあそれについては追々。とりあえず脱出する方法を考えるか。どうせもう『連絡』も行ってるだろうし」

言いながら、イノセントは扉の前につかつかと近寄る。ポケットを漁っていたかと思えば、その中から「お、あった」と取り出したるは

——針金。

目を剥く俺の前で、「ああそうそう」とイノセントは振り返った。そうして微笑む姿すら魅力的だから、きつと彼の周りの女性は苦労していることだろう。そんなことを思っていると、イノセントの口から思わぬ言葉が出た。

「君、走れる?」

「は?」

言った途端、イノセントは鍵穴に針金を差し込んだ。所要時間3秒。鍵穴は降参した。

そのまま扉を開け放った。

「出口までの道順を憶えてるんじゃないのか?! イノセント!」
「憶えてるんだけど、その道順に見張りがいたんじゃないあ」

走りながら、廊下を曲がる度に見張りが立ち上がる。狭い室内だから跳弾を恐れてか発砲はしてこないが、ナイフを持っている者もいる。そればかりは脅威だ。社畜生活で衰えた足腰に発破をかけながら走り続ける。画面に対する集中力はあるが電車通勤で立ちっぱなしだったぐらいで、マラソンなんて体育の授業があった高校生以来

だ。それでもなんとか見張りたちを潜り抜けて出口まで辿り着いたが、その頃には屋内の見張りたちは銃火器を持って集まってきている。男たちの中、ひとりが嗤う。

「俺たちから逃げようなんて甘っちょろいこと考えてんなあ」

「ちよつと痛い思いをしなきゃだめか？」

「痛い思いはいやだなあ」

イノセントはへらへらと笑う。笑っている場合か、と言いたいがし笑って誤魔化せる場面でもない。俺は嘆いた。ああ、あとこの扉を潜れば外に出られるのに――

そこで思い出した。自分に与えられたスキルを。

「――イノセント、下がってて」

声を低めて告げる。イノセントは怪訝そうだ。しかし自分は構わない。

この世界に来て、ようやくスキルを使う機会が来たのだ。自分は扉の横に立つと、大仰に腕を振った。

『剥がれて、あいつらを潰せ！』

そう怒鳴ると、重厚そうな扉は蝶番から剥がれ――集まっていた男たちに重い重い扉がぶつかつた。蛙を轢いたような悲鳴が上がった。

「さっ、逃げようイノセント」

こんなところとつととおさらばだ。そう思つて振り返ると――イノセントは呆然としていた。立ち尽くしている。俺は焦れつたくなり、イノセントの手首を掴んだ。

「ほら、早く逃げないと――」

「――お兄さん。名前を聞き忘れてたけど、なんて言うの」

「え？ 俺の名前は友哉……松下友哉」

「そう、トモヤ。いい、君のいた国ではどうかは知らないけど、これだけは聴いて」

そう言つて、イノセントは俺の両肩を掴んできた。その顔は、あまりに真剣なものだった。

「君、死ぬぞ。正確には殺される」

「えっ？」

「詳しくはあとで教える——とにかく君の言う通りだ、とつとと逃げ」
「おつと、そこまでだ」

俺は、故郷で見た映画で散々聴いた台詞を耳にした。

出口から出ようとした瞬間、銃口を突きつけてくる男たち。3人は残っている。彼らはあからさまに怒っていた。当然だろう。何がどうしてそうなったかはわからないが、仲間の大半が扉に潰されている。仕方ないので諸手を挙げる俺たち。しかしイノセントはどこ吹く風、涼しい顔だ。どんな余裕があれば、死の手前でそんな表情ができるのだろうか。半ば呆れていると、男たちは言う。

「仲間の大半が潰されたな……このままお前らには、いや、イノセント・ジェマーケット。お前にはついてきてもらう。本部で立て直さないな」とな

「あのちよつと待って、俺は？」

恐る恐る尋ねると、男は鼻で笑う。

「お前は要らん。なんだかよくわからんから連れてきたが……特に利用価値はなさそうだからな。ジェマーケット、お前は連れて行く」

「イノセント……！」

俺はスキルを使おうとした。なんだかよくわからないが自分は死ぬらしい。それでも悔いがないように動きたかった。あるいはこの世界に来るまでは後悔だらけの人生だったことが切欠だったかも知れない。サイコネシスで奴らを全員潰してしまおう。腕を動かしかけたときだった。

銃声。

「ぎゃあっ!?!」

それは男たちの方からした。驚く俺、なぜか微塵も動かないイノセント。おろおろとしているうちに、2つの銃声がした。それだけで事態は好転した。

銃を取り落とした男たちが3人。つまり俺たちに銃を突きつけていた男たちが全員しやがみこんでいた。見れば、足下から血が流れている。イノセントはその隙を突いて銃を2つ蹴飛ばした。それに倣って俺もひとつ蹴飛ばした。俺の方に飛距離に難があるのは恐ら

く単純な運動能力の差。俺がそれでも何事が起きたのか狼狽えていると、——声がした。

「おい、イノセント。無事か」

ハスキーボイスが印象的だ。見れば、スーツ姿の女性がそこにいた。手には二丁拳銃。女性とわかったのはタイトなミニスカートを穿いていたことからだ。それ以外はベリーショートのアッシュブロンドと言いい精悍な顔つきといい、まるで少年だ。イノセントと比べると、「男の子」っぽさで言えば彼女の方が上だろうか。しかしよく見れば美しい。俺が性別と美しさについて混乱している中で、彼女は我々を分け入って建物の中に侵入する。止める間もなかった。銃撃が轟く。中で何が行われているのかわからない。困惑している俺の前で、脚を抱えて悶絶したままの男たちを前に、イノセントは暢気に辺りを見渡した。

「今のはルーデかな？ 超長距離射撃。相変わらず良い腕前してるな」

「いやあの、イノセント？ イノセントさん？」

「んあ、なーに」

「今突っ込んでいった彼女は……」

「ああ」

そう言う、イノセントの顔はやや紅潮していた。場違いなほどの頬の染め方。室内からは呻き声がある。飄々と出て来たアッシュブロンドの女性は、「全員無力化したから縄持ってきてもらわない」と呟いている。そんな彼女を示して、イノセントは言った。

「この人、俺の彼女。マリーアって言うんだ」

「え？ ああ、なんだ初対面の人か。宜しく」

そう言っただけ無邪気に手を差し出してくるので、ああなるほどイノセントと同類か。そう思いながら、半ば思考停止した状態で俺はその手を握り替えた。

この国には警備会社が存在するという。警備会社、と言っても要は武闘派集団だ。

王家を守護することに命を賭す王立騎士団、国教を守ることに命を

賭す騎士修道会。彼らもそれぞれ治安維持活動はするが、縄張り争いが絶えない。

そこで、実際に契約を結んでいる相手の護衛及び救出を担当するのがこの国の警備会社だった。

「俺は命も貞操も狙われやすいからね。騒ぎが起きると騎士団にも騎士修道会にも通報されるけど、警備会社にも連絡がいくんだ。で、結局一番に動くのが警備会社ってわけ。契約者の利益に叶っているからね」

「何というか……世知辛いね……」

「まあぶっちゃけこの国だけじゃなくて近隣諸国にも似たようなシステムがあるらしいから。そう悲観することじゃないよ」

「どこに安心できる要素があった？ まあいいけど」

「しかしイノ、今回はどの方面だった？」

マリーアと紹介された女性がイノセントに問う。イノセントはけろりと答えた。

『ユヴェリア』目当てだったさ。全く懲りないよねえ」

「あの……そのゆう、えりーあって……」

「え？ こいつ知らねえの？ どこから来たんだよ」

似たようなことさつき言われたな、と思っていると「すっごい遠くかららしいよ」とイノセントが俺の言葉を復唱する。「ふうん」と納得したのかしないのか、マリーアは言った。

「ユヴェリアを知らないってことは、ひよっとしてこの国がどういう国かも知らないってことか」

「はあ、まあそうですね」

「ここはユヴェラント。正式名称はユヴェール王国。多種多様の宝石が産出されることで知られる国だ。ここだと宝石職人が尊ばれる。で、その中でも特に秀でていて、且つ作品にトウグラ^花を刻印^押できるのがユヴェリアだ。で、こいつはその最年少」

「どうも。最年少ユヴェリアです」

イノセントが頭を掻きながらお辞儀する。それに俺は顔を引き攣らせた。

「……それって、やっぱその、凄いことなんです?」

「メチャクチャすげーぞ。前の最年少も凄かったがこいつは別方面で凄い。ただ、この『トウグラをユヴェリアのみが刻印できる』って言うのに反発している奴らもいてな。何せ同じ天然宝石を加工したもので、トウグラがつくかどうかで価値が爆上がりする。他にもユヴェリアには様々な特典があるから、それで反発して、過激な連中がテロを起こすってわけだ。ほれ、この通りこいつ目立つ見た目してるだろ」

「ああ……まあ確かに」

白髪赤目はやはりこの世界でも珍しいらしい。おまけに絶世の美少年ときた。それにマリーアは嘆息する。

「鉱山から石を直接採掘したいなんて言って年がら年中三輪トラックでふらふらして。だから目を付けられるんだろ。全く少しは大人しくしろよな」

「宝石が俺を呼んでいるんだ……」

「反省してねえな。今回は一般人が巻き込まれたんだぞ、反省しろ」

「はあい……」

「それじゃあたしらはこいつら牢屋に放り込んだらエーデルシュタインに戻るから。それじゃあな」

そう言つて、彼女は去つていった。気が付くと周りには、スーツを着た人々がわらわらと集まってきてテロリストたちを文字通りお縄につかせている。そして彼らが去ったのち、「じゃあ宿に戻ろうか」と宣うイノセントに、自分は先程からどうしても気になっていたことを尋ねた。

「あのさ、イノセント……くん」

「イノでいいよ」

「じゃあ、イノ。あのさ、さつき俺が『スキル』を使ったとき、言ったよな?」

俺は言った。

『君、死ぬぞ。正確には殺される』。あれ、どういう意味……?」

尋ねる俺に、イノセントは腕を組んで嘆息した。そして言う。

「とりあえず洗車を終わらせてから話そうか」

Next.....

そんなの聴いてない！

洗車したお陰でぴっぴかの三輪トラック。「エーデルシュタインまで近道するから」と言っただけになるな……と洗車した俺は複雑な気持ちを抱きながら、「で」と切り出す。

「俺が殺されるかも知れないって、どういうことなんだ。人のいるところだと話せないって言うからこうして車に乗るまで待ったけど……」

「うーん……君がどこまでこの国、と言うかこの国近隣諸国一帯の事情を知っているかによるんだけど……」

ハンドルを握ったまま、イノセントは濁すように言う。目線は時折こちらに配された。どうやら余程の事情があるらしい。俺は言いしれぬ胸騒ぎを覚えながら、答えた。

「何にも知らない。俺、その、本当に『遠くから』来たから。この辺の事情をまるで知らないんだよ」

「ふうん……」

気のない返事。わかったのかわからないのか。俺が内心ではらはらしている、イノセントは言う。

「アキツシマネの出身に『しときたい』とか言ってたし、一文無しって言うし。事情はあるんだろうね。まあ深くは追及しないよ」

「そうしてもらえると助かる」

「ただ、追及せざるを得ないことがある。関わった以上ね」

イノセントの赤い目がこちらを一瞬だけ見た。

「——君が言ってた『スキル』とやら。あれ、……魔法？」

「魔法というか……魔法に近い何かだと思う。俺にもよくわからない」

実際よくわからないのだ。女神には「サイコキネシスが欲しい」とは言ったが、現在自分がどういいう力が源になってスキルを発動させているのかわからない。しかし、イノセントの言葉で希望が湧いた。もしかしたらこの世界にも魔女とか超能力者とかエルフとかがいる

のかも知れない。なんか初っ端からテロリストに遭遇したり、テロリストは銃火器を持っていただけ。俺が不安と共に希望と高揚感を抱いていると、イノセントは言った。断罪の言葉を。

「その力は、これからは使わない方がいい。と言うか、使うな」
「えっ……」

「言つたでしょ。死ぬって。これは比喻抜きの話」

イノセントはハンドルを切った。

「正確には、殺される」

「だ、誰に……？」

生唾を飲む俺に、イノセントは告げる。

「——騎士修道会」

「騎士修道会……？」

「知ってる？ ボトム教、って言う宗教」

「知らない……」

「まあ、だろうと思った」

車が緩やかに停まる。気が付けば山道に入っていたようだ。車の前を、草むらから出て来た鹿によく似た動物の親子が歩いていった。確か鹿の繁殖期は秋だったはずだから、この世界も秋なのだろうか。自分のいた世界も秋だったし。そんなことを考える。現実逃避だった。そんな逃避をしている俺に気付かず、イノセントは話す。

「ボトム教は、現人神と呼ばれる一族を教祖として祀る宗教。現人神は『奇蹟の御業』を起こす。石をパンに変えたり、水をワインにした
り」

「それは——」

石をパンに、水をワインに。待て、それは元の世界のとある宗教の話でも聴いた。世界三大宗教のうちのひとつで。偶然だろうか？

思わず顔を向けたが、イノセントは気にした様子はない。彼は話を続ける。

「ボトム教という名の由来は単に名字から来てるんだ。この一族は分家もいくつもあって……まあそれはともかく、ボトム家の人間は奇蹟を起こす。獣を人にしたり、空を飛んだり、水の上を歩いたり……と

にかく様々。当主は複数の奇蹟を起こせる者になる。大抵ひとつにつきひとつの奇蹟だから、起こせる数が多いほど『価値が高い』

イノセントは人差し指を立てた。

「そして、そのただひとつの奇蹟でさえ、現人神一族以外のモノは『起こしてはならない』。それは偽物、紛い物。贋物は神を冒瀆する存在。ゆえに、『在ってはならない』」

息を飲む。先程まで聞こえていた鳥の声が止んだ気がした。

奇蹟。恐らくそれは人知を越えた行い全般を指すのだろう。そして、自分のスキル、サイキック。自分はあるの女神に何を望んだ？

『——チート能力とか。転移する人間にも何かくれませんか』

「騎士修道会は、ボトム教を信仰し、そして守護する団体。昔は男性だけだったけど、ここ数百年は女性も加入できるようになった——女性も、戦える人は戦えるからね」

「戦う……？」

怪訝そうに見遣ると、イノセントは苦笑した。苦笑するしかない、という様子だった。

「騎士修道会の歴史は虐殺の二文字で彩られてる。魔女、吸血鬼、妖精、竜、巨人、人狼、その他モンスター……昔はそういうのもいたらしいけど、2千年前にはすべて駆逐されている。すべてだ。亜人種はほぼ人間で奇蹟も起こさないのは見逃されたいけど……特に魔女は入念に殺されたい。ただ、今でも定期的に『浄化』されてるから、今でもいるんだろうね。魔女は」

「魔女や吸血鬼まではともかく、モンスターも？　なんで？」

「存在が『奇蹟の紛い物』と見なされたって話を聴くな。モンスターは魔法を使えたらしいから。まあ、それも本に書かれたことだから本当のところはわからないけど」

言われて、俺が思い出したのは大人になってから買ったゲーム。どう見ても動物の亜種にしか見えない敵モンスターが、呪文を唱えられとも思えないのに自分たちが使う魔法と同じ魔法を使ってきたことがあった。この世界のモンスターもその類だったのだろうか。そう考えながらも、俺はイノセントを見た。イノセントもこちらを見て

いる。やはり美少年だな、などと思っっている場合ではない。今後の身の振り方が関わっている話なのだから。

「今までの話を聴いてきてわかったと思うけど。つまり、君が使う『スキル』とやらは、君がこの辺りで生きていく上では非常にまずい。……君がアキツシマネの出身と仮定して訊くけど、何で国を出て来ちゃったの？　なんでこの辺りのことを調べて来なかったの？　そんなに故郷にいられない事情でも……——トモヤ？」

「……あ……」

俺は膝の上で拳を握った。米神の血管が浮く。

ふつつつと、脳裏に浮かぶのはあの女神。

『うーん、まあ、あげられなくはないんですけどお……いいんですかあ？　次、あなたが行くことになる世界は——』

『いいでしょう。それでどんなスキルが欲しいんです？』

あのととき、あの女神は笑っていた。

嗤っていたのだ。

「あのクソアマア！」

渾身の叫びが、車内はおろか山中に響いた。イノセントは耳を塞いだし、窓の外から鳥が飛び立つ音がした。

その日、俺は思い知った。チート能力が障害となる異世界があるということ。

Next……

天使かな？

「ははあ、異世界から……」

その後、車中でおいおいと泣き崩れながらすべての事情を話した。イノセントは聞き上手だった。泣く俺を慰めながら絶妙なタイミングで相槌を打ち、「それから？」と続きを促す。おかげで元の世界で超過勤務200時間超えをしたことまで話してしまった。こいつカウンセラーの才能もあるな。あとモテるだろうな。顔は凄く良いし、なんか良いところの坊ちゃんらしいし、地位も高いらしいし。そもそも恋人がいる、ボーイッシュ美人の。こいつは元の世界では関わり合うこともなかっただろう勝ち組だ。それがこうして出会って関わることになったのだから運命というものはわからない。と言うか絶世の美少年によしよし慰められるとかどういいうプレイだ。そんなくならないことを泣きながら高速で考えていた。

一頻り話し終えたところで息を吐いた。イノセントは座席の下からなにやら取り出す。水筒のようだった。丸形水筒だ。それと同時に箱ティッシュが出て来た。ペットボトルはないが箱ティッシュはあるらしい。葉っぱを出されるよりはマシだが……。

「いっぱい泣いて喉渴いたでしょ。漬かんだら水分補給するんだよ」

「うう、有難う……」

ここまで世話を焼かれるとは。俺が情けなさを痛感しながらも言われた通りにすると、紙袋が差し出されたのでそれに屑を放る。水筒の蓋を閉めた俺に、イノセントは言葉を返してきた。

「俄には信じがたいことだけど、とりあえず普通じゃない力を持つてるのだけはこの目で見ちゃったからなあ。言葉は割と通じてるけど」「それは、なんか俺のいた世界の『英語』とほとんど変わらないみたいだから……」

「ああ、日常会話はエンデュミオン語だけど、正式な書類や場面だとアリストクラート語だからその辺覚悟しといて。国内外の共通語はエンデュミオン語だけど正式な公用語はアリストクラート語なんだよ」「あ、アリストクラート……?」

なんだそれは。どんな言語だ。思い悩みそうになったがとりあえずその悩みは横に置くことにした。今は自分の身の上話とこれからの身の振り方の問題だ。

気が付けば辺りはとつぷりと暗い。ヘッドライトで照らされた山道は、街灯などないからその光が切り裂くばかりだ。今日はこのまま車中泊だな。そう思いながら俺は言った。

「そういうわけで、この辺りの事情を全く知らないのはつい昨日まで違う世界にいたからなんだ。文字通り。だから俺のスキルがやばいってことは本当に知らなくて」

「それはわかったよ。——一応訊いておくけど、元の世界には戻れないんだね？」

問われて、答えに窮する。なんとか絞り出せたのは、「わからない」という言葉だった。

実際わからないのだ。あの真っ白い空間から放り出されたのは上空だった。概念的に「天の世界」ということなのだろうが、たとえば物理的に空へ飛ぶことができても戻れるとは思えない。

それに。

「正直な話、元の世界に戻りたいとは今でもあまり思えない。俺は、あの世界から出て来たかったんだ。だから、この世界で何とか生きていきたい。このスキルが使えないとしても」

「……そう」

俺の言葉に、イノセントは小さく呟いた。

そして、手を握ってくる。

目を瞞る俺に、イノセントは顔を覗き込んできた。そのルビーを溶かした円らかな目が、俺を映していた。

「大変だったね」

「——まだ、そんなに苦労はしてないけど」

「それでも、元いた場所から飛び出したくなるほどのことだったんでしょ。そりゃ大変だよ。俺はそこまで思い詰めた経験がないからわからないけど。ただ、大変だったんだな、ってことはわかる」イノセントは、握る手の力を強めた。

「この世界は……特にこの国はそこそ物騒だけど、でも、優しい人も多いよ。だから、トモヤのこを受け入れてくれると思う。まあ、スキルのことと異世界のこととは絶対話さない方がいいだろうけど」

「異世界のことも？」

「異端狩りされるよ。世界を飛び越えてくるとか、そんな奇蹟起こしたなんて知られたら。拷問の末火炙りされたい？」

「嫌だよ！ 奇蹟を起こしたのはあのクソ女神なんだけど……?!」

「騎士修道会にとつては神はボトム教の教祖一族だけだから。諦めなさい。ま、とにかく」

イノセントは微笑んだ。どう見ても男なのに、慈母という言葉が浮かんだ。

「俺が助けになるよ。とりあえず、どうしたいか。これからどういう身の振り方をするか。エーデルシュタインに着くまでに考えよう」

そこで、俺はふと不安になる。だから、それを直ぐ口にした。

「なんでそんなに親切なんだ？」

「え？」

「会って1週間も経ってない、身元も不確かな不審者だぞ。こんなほっぽりだした方が——」

「だって」

イノセントは大きな目を瞬いた。

「困ってたじゃん」

「——は？」

「困ってる人を助けるのは、当然のことですよ」

そう、真つ直ぐに言うので。

俺は危機感を抱いた。

（駄目だこいつ。治安が悪いって言ってたのに、そんな国でこんな考え。いつ取って喰われるかわからん……!）

「……そうか。有難う」

「どういたしまして」

俺はその手を握り返した。強く、強く。

少なくとも俺が傍にいる間は、この少年を守ってやらなければ。俺

はそう決めた。

そのときは、スキルを使うこともやむないと。そして、きっと後悔はないだろう。そう思った。

この善き人のために。

イノセントの手から毛布が渡される。まだ暖かい季節だが、車中泊をするには寒い。一応ヒーター機能もついている車らしいが、ガソリンが勿体ないということに使わないらしい。俺は風邪ひかないといいなあ、と思いながら、ふと尋ねた。

「ところでイノ。エーデルシュタインってどこだ」

「ああ、説明し忘れてた。首都だよ。この国の首都。参祖の宗家が集つてるところ。つまり王家と王立騎士団団長の家と俺の実家が揃い踏み」

「緊張しそうだなあ。あと聴き忘れたんだけど、その3つが参祖なら、そのボトム家とやらを加えて四祖にはならんの？」

そう尋ねると、イノセントは欠伸をしながら座席に埋もれる。

「理由があつてね。ボトム家は違うんだ……まあ国を盛り上げたのに間違いないけど……その辺はまた明日ね……お休みなさい」

「お休み」

疲れていたのだろう。俺たちはすぐに寝入ってしまった。

結局首都に着くのは翌日の昼過ぎとなる。

Next……

経歴詐称カツコカリ

山道を三輪トラックで抜けて通っていった先。辿り着いたのは、舗装された道路。街灯が等間隔に並べられて立つ。電柱も同様だ。高層ビルこそないが、建物は比較的近代日本に似ている気がした。もともとデザインそのものはヨーロッパのそれに似ていたが。車が行き交い、人が行き交う。車は見かける度に四輪車だったので、ひよつとしてこのイノセントの車が例外なのだろうか。そんなことを考えながら車中から外を眺めていた俺に、イノセントは微笑ましそうな声で言う。

「君の元の世界だと首都はどんな感じだったのかな？」

「うーん、もう少し車も人も多かつたかな」

「それ交通事故起きない？ こっちだと減多に起きないけど、車の数が少ないから」

「起きる起きる。社会問題になって久しいよ。ところで俺らはどこに向かってんだ？」

「まあ着けばわかるよ」

舗装された道路。人混みが少なくなっていたが、それに比例するように車の速度も落ちていく。そろそろ家だろうか？ 駐車スペースでもあるのだろうか。そう思っていた矢先、車が停まる。イノセントが出て行ったのを見送りながら、フロントガラスから外を見ると――左手に、壮麗な塀。それがぐるりと一帯を囲んでいる、らしい。らしいというのは、車中からだど塀の端が見えなかったからだ。俺が途惑っている、がちやがちやと音が鳴る。まるで門を開くような。

イノセントが車に戻ってきた。

「着いたよ。俺んち。とりあえず俺んちで落ち着いて。服のこととかあるしね」

「ああ、それはどう――えつ、『俺んち』？」

車のドアが閉められ、車体が曲がる。門らしきところで、門番らしき男たちが助手席のこちらを見据えてきた。

そして俺は、ジェマーケット邸に入ることに成功したのだった。

「イノセント坊ちやま、お帰りなさいませ！」

使用人らしきメイド服と燕尾服の者達が駆け寄ってくる。彼らに荷物を手渡したイノセントは、俺を示して「客人だから丁寧に扱おうにね」と言う。使用人たちは怪訝そうにしながらも「こちらへどうぞ」と案内してくる。通された先は、どうやら風呂場。広々とした湯船にシャワーヘッドがあったから、どうやら使い方は日本式と変わらないらしい。それに安堵しながら垢を落とす。一通り体を洗い温まったところで出て来ると、バスタオルを待ち構えたメイドがいて仰天した。

「じ、自分で体は拭けますので」

「これが私の仕事ですの。さ、お背中を」

そう言われては、社畜歴5年の自分としては逆らえない。フェイスタオルで手足を拭いていると、服が用意された。

安心したのは、用意された服が俺の元の世界からも常識が逸脱していないことだった。パンツはどうやらゴムあるいはゴムに似たものがある世界らしく、普通のトランクスだった。襟のついた白いシャツにベスト、スラックスにループタイ。靴だけはそのままだった。靴は自分に合うものを探さないと、と思いつながら風呂場から出ると、イノセントはつなぎの作業着姿のままだった。客の俺が洗われたのにいいのだろうか、と思っていたら「坊ちやま、せめてお着替えください。いつも申しあげているでしょう」とメイドに苦言を呈されていた。やはり駄目らしい。しかもいつもらしい。イノセントは「いいじゃん別に」と頭の後ろで手を組んだ。メイドはそれで諦めたように頭を振った。イノセントはこちらに気付いた様子で手を振った。

「おっ、上がった？ それじゃ弟と会ってもらおうか」

「弟さん？ ご両親は……」

「あー基本寝てるから、2人とも。まあ機会があったら会わせるから」
あつさり言つてのけたが、俺はかえって怖じ気づく。これだけの豪邸で、当主だろう夫婦は恐らく寝たきり。そして、イノセントは確か長男だとか言っていなかったか。と言うことは弟がこの家を仕切っている？

(どんな厳格そうな男なんだか。そう言えばイノはいくつだ？ 見たところ15才ぐらいだが)

「こつちね〜」

俺の思考に気付いた様子もなく、イノセントは暢気に俺を先導した。屋敷の奥へと。

やがて辿り着いたのは、荘厳な、恐らく檜の木の扉。それをイノセントは無遠慮に3回叩く。「どうぞ」と低い声が出た。聞き覚えがある、とても。それはイノセントの声とよく似ていた。兄弟だからだろうか、と俺が思っているとイノセントがやはり無遠慮に扉を開いた。

「アダマスー、ただいまー」

「兄さん、またどこをほつつき歩いていたんだ」

ずらりと並ぶ本棚。窓を背に重厚な机に向かい、座り心地の良さそうな革張りの椅子に座る——少年。服装は豪華だ。袖口や胸元にふんだんにフリルがあしらわれ、襟を青い大きなリボンが飾る。恐らく、どれも絹。サスペンダーが見えたがストラックスなのか短パンなのかは机に隠れて見えなかった。髪は直毛の黒、ショートボブだ。目はサファイアを溶かしたような青。肌は触れれば溶けてしまいそうなほどに白い。15才ほどに見えた。

そして俺の眼には、ある事実が映っていた。

「うわ同じ顔。色違いだけど……ひよつとして双子？」

「言うと思った〜」

「確かに僕と兄さんは双子だが、あなたは？ 兄さんが客人を連れてきたと先触れがあつたが……」

「あの、お兄さんに拾われた身でして……それでこちらで職を紹介してもらえる、と」

そうなのだ。

エーデルシュタインに着くまでの途次、車中でイノセントと話し合ったのは、まず身元を固めること。そして、生きていく上で必要な「金」を手に入れるために仕事に就くこと。そのために、イノセントが「こういうことが得意な奴がいる」と言ってくれたのだが——まさか、この一見儂げなゴスロリ少年がそうとは俄に信じがたかった。否、イ

ノセントも僂げではあるのだが、つなぎの作業着を着ている姿と比べるとどうにもそのイメージとちぐはぐだ。俺が混乱していると、アダマスは書類を片手に溜息を吐いた。

「また面倒事を持ってきて……兄さんは黙って石を彫っていけばいいのに、各地の鉱山を飛び回っては石と一緒に何かしら持ち込んでくる。それで今回は石の収穫はあったのか」

「それが今回は収穫なしなんだよね。だから彫りかけのやつ彫ることにするわ。まあそれはいつでもできるからいいとして、今は彼のこと。トモヤ・マツシタ。アキツシマネ出身でこの辺のことは常識レベルで知らない。ただしサラリーマンとして働いていた時期はあるっでさ。エンデュミオン語も話せるし文字書きもできる」

「どうも……」

——さらに虚実織り交ぜた経歴をでっち上げた。

イノセントが俺の経歴を聴いてその場ででっち上げたものだ。こいつ、詐欺師の才能もないか。俺が訝しみながらも、賢明にも黙っていると、アダマスは鼻で笑った。

「ふん。大方身元不明の奴を拾ったからどうにかしろ、そう言いたいんだな」

「まあ、遠からず」

「構わん。しかしサラリーマン勤務経験があるというのは嬉しいな。何ならうちで直接雇って——」

「あ、あの。身元を保証してもらえただけでいいんです。あと職が決まるまで、最低限衣食住を保証してもらえれば……」

後半はだいぶ図々しいと理解しながらも、俺は言う。

実のところ、車中でもイノセントに言われていたのだ。俺は元の世界では資材部だった。だから宝石商だというジエマーケット家で働くには充分能力があるんじゃないか、と言われた。

しかし、ここに至ってなお、俺は諦めていなかった。

即ち、異世界ライフを。異世界ライフと言えばジョブ。転職。イノセントに聴いた限りではこの世界には白魔導士とか剣士とかそういうのはなさそうだしそもそもRPGにおける金を巻き上げる対象の

モンスターも駆逐されて久しいと言うからそういう「旅で稼ぐ仕事」というのはなさそうだ。それでも異世界で職業を得るといいうのは心躍る響きだ。

きらきらと目を輝かせているだろう俺をどうどうと抑えながら、イノセントはアダマスに言う。

「そう言うわけで、アダマスにはトモヤの身元引受人になって欲しいんだよね。ふらふらしてる俺よりしっかりしてるでしょ」

「僕の仕事を増やす気か」

「でもアダマス、仕事好きだよ。ワーカホリック」

「……否定はしない」

「仕事の紹介の方は俺がするからそれだけ宜しく。あ、あとしばらく彼、ウチに住ませるから」

「は!?!」

「えっ」

アダマスと俺が同時に驚く。イノセントはしれっとしたものだ。

「もう使用人たちにはトモヤの部屋の準備はさせたから。食事の用意もさせたし」

「そんな勝手な」

「だってアダマス。そうじゃなきゃわざわざ職が見つかって安定するかわからないうちに一々住処を変えさせるの、かえってしんどいよ。ウチから通わせた方が楽。衣食もそうだし。なんならトモヤの分は俺が出していいし」

激しい応酬。しかしやがて、アダマスの方が折れた。

「……全く、兄さんは本当に面倒事を持ってくる天才だな」

「トモヤ、俺褒められた」

「やったなイノ」

「褒めてない!! 全く……窮鳥懐に入れば猟師も殺さず……違うか? まあ、仮にも兄さんが信用したんだろうし、置いておいてやってもいい。実質上の現シエマーケット家当主が許可する」

そう言われて、俺は首を傾げる。——「実質上の」?

そんな俺に構わず、アダマスは笑った。出会って数分、はじめて見

る笑顔だった。その笑顔はイノセントに似ていた。立ち上がったア
ダマスは、俺の前に出て手を差し伸べてきた。

「宜しく、トモヤ。今日からあなたは我がジエマーケット家の大事な
客人だ」

「早いところ出て行くつもりなので、それまで宜しくお願いしますね」
さて、翌朝からイノセントに連れられて職場体験のコースに出るこ
とになったのだが、これが一筋縄でいかなかった。

N e x t

異世界就活はじめます

朝、起こされて饗された朝食は豪華、と言う言葉で表せばいいだろうか。昨晚の夕食も豪華だったし、恐らくこの国の富豪のスタンダードなのだろう。尤も「この国の3つの祖のうちのひとつ」と称されるほどの家柄らしいのでグレードは恐らく段違いだろう。この国の領土面積や人口のほどはまだわからないが。ただ、量が元の世界の欧米基準だったのは勘弁して欲しかった。イノセントもアダマスも平然とすべて平らげていたので尚更肩身が狭い。昨晚の夕食のあとでイノセントにこっそり相談したが、今朝の朝食はハム1枚減ったぐらいだった。俺にとっての食事の適正量の先行きが遠い。これは本当に早々に仕事を決めて家を出ねば。社畜時代もそれなりに努力して自炊はしていたから多少なりとも料理に自信はある。……とは言っても家に帰ってくる頃には常に体力がギリギリだったのであまり自炊、とはつきり断じることのできる料理のレパートリーは少ないが。それに台所がどういう仕組みかもまだわからない。そのうち使用人の人に頼んで厨房を見せてもらおうか、しかし恐らく大富豪の家の厨房など参考になるだろうか――

「トモヤ、足下」

「えっ、うわっ」

イノセントに指摘されて慌てて踏鞴を踏む。道の端を歩いていたせいか、割れた敷石に躓きそうになっていた。朱色のそれから2、3歩離れると、イノセントは苦笑した。

「この辺ちよつと治安悪いからね、整備が行き届いてないところもあるんだよね。役所に電話しないとなあ」

「えっ……治安悪い……?」

「あー大丈夫、タマ取られるほどじゃないから。それよりほら、ここが俺が連絡つけといた先の――」

「テメエふざけんな!!」

その怒声と共に――どうやら少女の声――、激しい物音。俺は驚いたが、イノセントは平然としている。俺が恐る恐るイノセントの背後

から見ると、道路に椅子が複数、テーブルがひとつ転がっていた。ガーデンスタイルの店だろうか。あと、男がひとり。中年で、恰幅が良すぎる。そんな男が「何をするんだ！」と頬を押さえながら地面に座り込んだまま怒鳴った。……もしかしてビンタあるいはパンチひとつでテーブルや椅子を巻き添えにするほど吹っ飛んだのか。男が弱いのか、少女が強いのか——出て来た少女は、栗色の髪の毛、澆刺とした印象の少女だ。今は怒気に漲っているが。

「ああ？ 女のケツ触つといて『何をするんだ』だあ？ いい度胸してんな、この酒処ミシユレで女にセクハラ働くような奴ア——」
「エミー、そこまでにしておけ」

そこに、落ち着いた声が降ってくる。俺が見ると、そこには彼女と同じ栗毛の、精悍そうな青年が彼女の肩に手を置いていた。印象的だったのは、190cmは超えていそうな高身長もそうだが、腕や首に覗く細かい刺青だ。恐らく服の下はもつと彫つてあるだろう。その強面と高身長と刺青の三重奏が、見ているだけの俺も怖じ気づかせる。それに気付いた様子もなく、男は顎で中年男を示した。

「そいつを見ろ。足腰立たなくなってる」

「ああ？ ちつ、仕方ねえな……おい、料金はタダにしといてやる。2度はねえぞ」

「……くそつ、言われなくても2度とこんな店来ないからな！」

捨て台詞を吐き、中年はふらつく足腰を叱咤するように道向こうへと駆け去っていった。

その姿も見えなくなつた頃、ざわめきがやってくる。見ると、このときはじめて遠巻きに客が複数いるのに気付いた。それぞれジョッキと、つまみが乗っていると思しき皿を手をしている。彼らは無事に並んでいるテーブルにそれぞれ席に着きだした。テーブルを戻す、エミーと呼ばれた少女は打って変わった愛想の良い笑顔で客に対応する。

「すいませんね、お騒がせしました。クソ客は追い出したんでどうぞゆっくり飲んでってください」

「はは、エマは相変わらず血の気が多いね」

「え？ ああ、なんだ。イノか」

「イノだつて？」

栗毛の少女と青年が顔を出してくる。そんな彼らに、イノセントは言った。

「電話したでしょ。とりあえず職場体験させたい奴がいるつて。とりあえず今日一日働かせて欲しい奴がいるの。ほら、トモヤ。挨拶して」

「ああ、電話で言つてた奴か」

とは青年の方だ。強面にやや怯えながらも、俺は自己紹介した。

「どうも、トモヤ・マツシタです。アキツシマネ出身です。この辺の常識はさっぱりなんで、教えてもらえると助かります」

「酒場で働いた経験は？」

「あー、昔、似たような店を一時期だけ」

昔というのは大学生時代、社会経験としてアルバイトをしていたときのことだ。その後就活がはじまったので居酒屋は辞めてしまったが……そんなことを思い出していると、男とエマと呼ばれた少女はこちらを見る。

そして「いい」とほぼ同時に答えた。

「2人じゃ最近回らなくなったところだしな」

「エシーは合唱団の方に行っていることが多いし、そもそもあいつ酒場で働いた経験がなかったしな。少しでも経験がある方が嬉しい」

エシーとは誰だろう。そう思っていると、彼らはこちらを見て手を差し伸べてくれた。

「まあそれじゃ宜しく。トモヤ。俺はラファエル・ミシユレ。ラフと呼んでくれ」

「私はエミリア。エマでもエミーでもいいよ」

「宜しくお願いします」

俺はそれぞれの手を握った。

そこまではよかったのだ。

「3番テーブル！ 大ジョッキ3つ！ ポテト大皿3つ！」

「5番テーブル！ 中ジョッキ2つ！ 枝豆中皿5つ！」

「6番！ レモン耐ハイ3つ！ バタピー小皿1つ！」

「唐揚げまだー!？」

「えっこの世界焼酎あるの？」

「トモヤ！ 何か言ったか?!」

「いえ何でも！ 1番テーブル空きましたのでお待ちのお客様どうぞ！」

正直に言おう。クソ忙しい。

システムは一通り教わったところ、元の世界の居酒屋とあまり変わらなかった。ビールサーバーが樽から直接、というところは違ったが。

そこからは目の回る忙しさだ。昼間なのに酒を飲む客が多いこと多いこと。さらに太陽が西に沈みかけてくるに従って客が増えしていく。地獄だ。

店の構造は室内の席と、テラス席。秋なので店内と店外の温度差はさしてひどくないが、出るのに地味に時間を食う。店の構造に問題がないか、と思ったが今言ってもすぐに店が改装できるわけなし。なので声だけは元気に、しかし黙りながら配膳をする。「よっ新入り？」と客が気さくに声をかけてくれることが救いだ。

あと、推定看板娘のエミリアがかわいいこと。これも救いだ。

27才の自分が、どう見てもイノセントと変わらない年頃の少女に抱く感想としては犯罪でしかない。しかしここは異世界。どうにかならないだろうか。多分無理だな。なんかこの世界は元の世界と倫理観や法の基準が変わらないところがある。そう諦めつつも、まあやっていけそうかな？ とうつすら思いはじめたときだった。

聞き覚えのある声が届いた。

「やつほーエマ！ 席空いてる？」

「マリアー、それにルーデにスヴァル。来やがったか」

その声にエミリアが渋面を作る。先程セクハラ親父を殴ったときよりもひどい渋面だ。

見れば、アッシュブロンドの女性が2人。ハニーブロンドの男性がひとり。前者の女性に見覚えがあった。確か、彼女は――

「えーと、マリーアさん、でしたっけ」

「え？ あんた誰だっけ。——ああ、この間またイノが攫われたときに一緒にいた奴！」

「え、ああ彼がそうなのか」

「またイノセントは攫われたのか」

女性——アッシュブロンドのベリーショート。こうして落ち着いてみると、明るい青の双眸が印象的だ。仕事帰りなのかスーツのまま、それは同じアッシュブロンドで長髪の女性も一緒だ。髪も目の色も一緒だし顔も似ているから恐らく姉妹かなにかだろう。そして連れだって歩いてきた青年も同様だ。同じような顔が3つ。たぶん姉弟かなにかだろう。そう勝手に判断していると、3人は席に着いた。そして、マリーアが代表して俺に言う。

「それじゃ、とりあえず樽3つ」

「はっ？」

「いつも通りの注文だからエマがラフに聴いて。それで通じるから。あとポテト大皿で3つ、唐揚げ小皿で3つ、枝豆小皿で3つ。以上」

「は、はあ……」

言われたままに俺は店の奥に引っ込んだ。そして調理場にいたラファエルに言う。

「すいません、なんかビール樽3つとか言われたんですけど」

「ああ……マリーアたちか……」

何かを察したらしいラファエルが、げんなりとした顔で言う。そして、どこかに行つたかと思うと、何かを転がしてきた。……3つほど。それが大きな樽だと気付いたのは、足下にまで来たときだ。

呆ける俺に、ラファエルは「お前も運がなかったな」と溜息を吐いた。

「あいつらはマグダレーナ家の人間でな……」

「えーっと、確か、この国の騎士団団長の家系とかって言う……」

それは憶えていた。ちよつと待て、そんな家の人間が警備員なんてやっているのか？ そう思った疑問を余所に、ラファエルは深々と息を吐いた。

「マグダレーナ家は代々酒好き、それも麦酒好きでな……しかも酒豪なんだ……」

「……つまり、彼らにとって『樽3つ』というのは」

「とりあえず生、という挨拶と一緒にだ。さて、これを持っていってくれ……重いだろうから腰に気を付けろよ……あと注文はなんだった？」

「あ、えーとポテト大皿で3つ、唐揚げ小皿で3つ、枝豆小皿で3つだそうですね」

「それ以上にまた喰うんだろうな……ああ……あいつらが来ると儲かるんだが、儲かるんだ、が……」

ラファエルの悲哀が、俺には痛いほどわかった。

儲かるって、仕事が増えるってことだもんな。俺の会社はブラックで経営自体が行き詰まってたけど、普通は儲かった結果仕事が増えるもんらしいし。

しかしそれは口に出さず、俺は黙って重い重いビール樽を運ぶことに専念した。

夜10時。閉店時間である。そこに、イノセントが迎えに来た。

「やつほー、トモヤは元気にやってた？」

「ああ、イノ」

店終いをしていたエミリアが、イノセントの言葉に俺を示してくる。

俺は空いた机に突っ伏していた。

近付いてきたイノセントは、「どうだった？ 職場体験1日目」と尋ねてくる。

俺は言った。

「……麦酒樽11個は、もう運びたくないかな……」

「ああー、マリーアたちに当たっちゃったかー。まあいいんじゃない？ この店マリーアたち行きつけだから、ここで働いてたらいつかは経験してたことだよ」

「それもそうなんだが……だが……」

「トモヤ、そのテーブル拭きたい」

「すいません……」

エミリアに言われるがままにテーブルから離れる。そして床にしゃがみ込んだ俺は、イノセントにぼやいた。

「とりあえず、明日は1日休みを挟んでくれないか……多分明日筋肉痛になってるから……」

「はいはい。話はつけとくから。今夜はもう帰ろうね」

そしてイノセントは、俺の手を取ると、夜道を聴いたことのない童謡を歌いながら先導していった。

俺は知らない。残された兄妹2人の会話を。

「イノ、随分親切だったね」

「あいつが親切なのは昔からだろう」

「あいつのあの親切さが仇になったことなんて、いくらでもあるだろうに」

「それでも懲りないんだよ、あいつは」

Next……

マツドサイエンティストならぬマツド女彫り師

前日の酒場での力仕事が堪えて、見事に筋肉痛を負った。無残にベッドに沈む俺に、湿布を持ってきてくれたイノセントは俺の腰やら脚やらにべたべたとそれを貼りながら言った。

「職場体験についてだけどさ、明日ちよつと遠出する気ない？」

「明日？ 多分その頃には筋肉痛も治まってるだろうからいいけど……次はどういう職種だ」

「彫り師の助手、つてところかな」

「彫り師イ？ 彫り師って言うのと、刺青を彫る人のことだよな」

「そうそう」

一通り湿布を貼り終えたイノセントは、部屋の片隅に置かれていた机から椅子を持ち出して、俺のベッドの前に背もたれを前にして腰掛ける。手にしている書類は情報でも載っているのだろうか。そう思っていると、イノセントは笑う。

「トモヤの元いた世界がどういう状況かはわからないけど、中々どうしてこの国の実情にそぐわしい仕事なんだよ。見て損はないと思うよ」

「ふうん……？ まあ、そう言うなら……」

俺はその案件を承諾した。イノセントが笑い含みしていたことには、気付かなかった。

本場に「ちよつとした遠出」だった。既に馴染んだ三輪トラックの狭い助手席。1時間もしないうちに、町並みは変わって行って、白い石造りの家々が見えた。何より特徴的だったのは、堆い山——イノセントに聴いたところ、それは鉱山だという。そう言えば宝石の国とか言っていたような……？ 俺が納得しながらも首を傾げていると、「ほら着いたよ」と言う言葉と同時に車が停まった。

「ここはサンデライラ。首都東寄りに外れの鉱山の麓にある村だよ」

イノセントに連れられて先導された先。そこは白い石造りの家の中でも平均的な大きさに見えた。ここが彫り師の店か？ そう思っていると、イノセントは開け放たれたままの出入り口から声を張り上

げた。

「おーいエヴリン、エヴァー！ 職場体験の人連れてきたよー」

「え？ 早かったね」

メゾソプラノの声。可憐なその声に反して足音は荒い。顔を覗き込ませたのは、頭にバンダナ、チューブトップと、腰に巻いたツナギの袖のうら若い女性だった。年の頃で言えばイノセントと変わらなそう。どうやら労働基準法というものはこの世界にはないらしい。ついでに既にわかつていたことだが、たぶん運転免許に関する法律もゆるゆるだ。推定15才のイノセントが普通に車を乗り回しているので。

俺がそんなことを考えているのを余所に、イノセントは粗方俺についての説明を終えたらしい。出入り口から出て来たうら若い女性は、手を差し伸べてきた。どうやらこの世界では握手が基本的な挨拶らしい。断る理由もなかったので握り替えた。その手は職人らしく硬かった。

「じゃ、俺はちよつと石を採掘してくるから」

とイノセントはヘルメットを被って気軽に鉱山へと歩いていった。そう言えばツルハシとかノミとか持って行ってたな。そう思いながらも彼女——エヴリンと名乗った女性に、微笑まれて先導された。バンダナから覗く浅い金色の髪と、鮮やかな緑の目が清冽で。彼女を美しい、と言うよりも「きれい」という言葉で表現したくなった。涼やかな河原のような印象を受けた。

その印象も、次に彼女が語り出した言葉で吹っ飛ぶのだが。

エヴリンは「はーしかし勿体ない」とぼやく。

「何がです」

俺が思わず問うと、彼女はぐるりとこちらを向いた。びびったのは内緒だ。彼女はセミロングの髪をポニーテールにしている。それが激しく揺れる様は圧巻だった。

「だってさ、イノセント！ 勿体なくない？」

「何がでしょう」

「あの全身白粉を塗ってるんじゃないかってほどの白い肌！ つやつ

つやの皮膚！ 絶対刺青が映えると思う！ 何回も何回も何回も彫らせてって言ってるのに、頑なに彫らせてくれないの。『仮にもジェマーケット家の長男だから彫り物はちよつと』って！ でもあの素材は勿体なさ過ぎる！ あああ、彫りたくて彫りたくて腕が疼いてきた……」

「お、落ち着いて……」

「おーいエヴァ、続き彫ってくれー」

「あ、すいませーん」

息を荒げるエヴリンを宥めたのは、結果として客からの呼び声だった。そこは商人らしい。すぐに飛んでいった。

ぼつんと残された俺は、することも思いつかず、とりあえず手近の本棚にあった書籍を読むことにした。

即ち、「ユヴェーラントと刺青の歴史」。

——ユヴェーラントは移民の国である。

各種様々な宝石が発掘されることが発覚したこの国に、あらゆる移民がやって来た。一攫千金を夢見るモノ、出稼ぎのために来たモノ、様々だ。主な人間は鉱山で働く労働者となった。

けれど鉱山で事故に遭うと、ひどいときは体の一部しか出て来ない。もちろん体の一部なので、誰の死体かわからない。

そこで、誰がはじめたかはわからないが、労働者は刺青を彫るようになった。

このユヴェーラントにもある海の漁師が船出して、海難事故にあったとき。どんなに膨れた体だろうとそのセーターの模様でどこの誰かがわかるように、女たちはその家々独自の模様のセーターを夫のために編むという。

刺青はつまり、そのセーターの替わりなのだ。

体の一部しか見つからなくても、それが誰かわかればせめて墓標に名を刻める。場合によっては、その労働者の故郷に手紙を出してやるのだ。

(つまり、俺の元の世界で言うドッグタグみたいなもんか)

「おーい、えーと名前なんていったっけ」

本を閉じる。恐らく俺のことを呼んでいるのだろう。咄嗟に本棚に差し戻してから彼女の元へと歩いていった。

「トモヤです」

「そう、トモヤ。ちよつと手伝って」

「とは言っても、俺、彫り物の知識なんてありませんよ」

「大丈夫」

そう言っつて、エヴリンは。緊張した面持ちでベッドに横たわる男性を見遣る。見たところ若そうだ。とりあえず会釈した俺はどういうことか、と目で訴えると、彼女はウインクで答えた。

「君、まだ若いでしょ。力仕事だよ」

成る程。理解した。

「うああああああ、いつてええええええ」

「ほらほら、忍耐忍耐。私の腕前ならすぐ終わるからねー」

人間、痛みには反射で手足をばたつかせてしまう。そのために手なり脚なり抑える担当が必要なわけだ。力いっぱい抑えているつもりだが、相手は如何せん若い鉦山労働者(推定)。元氣いっぱいには脚がばたつく。それでも俺は必死で抑え続けた。この刺青が、この年若い労働者の死後を保障するものだとして既に学習したから。

結局、その日抑えた客の数は3人。暴れる脚を抑えるのは中々重労働だった。

イノセントが迎えに来たのは夜7時過ぎのことだ。

「やあ大漁大漁。やほー、トモヤは元気にやってる?」

「ああ、イノ。今日は助かった」

エヴリンは彫り道具を片付けながら笑う。

「いつもなら客の暴れる手足を躲しながら彫り物をしていたからね。抑える係がいるのは助かる。今度からバイト募集かけようかな」

「それはよかった。で、トモヤは?」

「そのベッドを見て」

声がかかる。俺は、客用ベッドのひとつで突っ伏していた。それを見て、イノセントが「あちやー」と声を上げた。

「もしかして今日も筋肉痛になりそう?」

「……悪いが、明日また休みを挟んでくれ……」

「おっけー。さあ帰ろうか」

言いながら、イノセントは俺に肩を貸してくれた。

「それじゃまた今度ね、エヴァ」

「ああ」

そうして俺たちは車に戻ろうとした。その途次、イノセントはこっそり耳打ちしてくる。

「頑張ったご褒美に、面白いことを教えてあげようか。あ、でも周りには秘密ね」

「ご褒美……?」

「仕事中に見たと思うけど、エヴァの刺青はとっても繊細だったでしょ」

言われて思い出す。暴れる手足を押しえながらだったが、ちらりと見えた彫り細工はとても緻密だった。それを思い出し、既視感を覚える。

あれ、どこかで見たな。あんなディテールの刺青……。

「君がこの間職場体験した酒処ミシユレ。あそこの主人のラファエルを憶えてる?」

「忘れられないって。長身の強面で刺青があって、……あ?」

「そ」

答えるイノセントの声は短い。

「あいつの刺青は確か全部エヴァの作品。あいつ、趣味が刺青だからへえ……。……で、どれが面白いって?」

「うん。それでまあよくある話なんだけどね」

イノセントは囁いた。今日一番小さな声で。

「付き合ってるの。ラフとエヴァは」

「……は? あの……エヴリンさんって、その……お前と年が変わらないように見えたけど……」

「違わないよ。俺の1歳下」

「彼の妹さんのエマも、お前と年が変わらないよな……?」

「うん。で、ラフは24」

しばしの沈黙。

「……この世界じゃ犯罪じゃないのか？ それは」

「犯罪ではないけど、道徳的にまずいって言うのはある。少なくともラフはエヴァと付き合ってること……って言うか自分の妹と年の変わらない彼女がいること自体隠してる。まあわざわざ刺青を施術してもらうために遠出しててるから、何かあるって怪しまれてはいるだろうけどね……」

そう言うってから、イノセントは続けた。

「まあそういうわけで、トモヤ。君もこのことは内緒にね」

「お前が言わなきゃわからなかったことなんですけどね？」

イノセントは笑って誤魔化した。

なおこの後、帰宅後再び湿布を貼る俺に、仕事が終わったらしく部屋を訪ねてきたアダマスが「力仕事、向いてないんじゃないか？」と至極真つ当なことを助言されることになる。

Next……

その日、主人公は思い出した

夢を見た。この世界に転移してくる直前、あの異空間で出会った女神。彼女にもらった異能——スキル、サイキック。それを使って、ドアをぶち破ったんだっけ——

俺はそこで目を覚まし、ベッドの上で身を起こして、愕然とした。職場体験、最初の日の酒場でのビール樽運び。

その次の、彫り師の店での暴れる客を抑える係。

それらで見事に筋肉痛を負った俺は、今日、こうして夢を見て思い出す。そして胸の裡で慟哭した。

（スキルをこっさり使えばよかったじゃんか……！ 何の為のサイキックだよ！）

「トモヤー、起きた？」

ノックを3回。叩かれた扉の向こうから、イノセントが今朝も暢気に笑っていた。あのとき、「その力を使えば死ぬぞ」と肩を掴んで来たときの顔とは、まるで違った。

「今日はねえ、喫茶店を紹介しようと思って」

「喫茶店かあ。この世界にもあるんだな」

ジェマーケッツ邸を出て、歩いて数分。それなりに賑やかで、それでいて穏やかな街角。本を抱えて歩いている青年も見かけた。こういう異世界では本は貴重品という印象があるのだが、この数日暮らしてきた所感としてこの国はイギリス産業革命辺りを彷彿とさせる。それ程貴重品ではないのかも知れない。そんなことを考えながら歩いていると、喫茶店の看板が見えた。「喫茶フェブラリー」、というところか。共通語は英語に似たエンデュミオン語で、公用語はアリストクラート語などという俺にとって未知の言語らしいが、どうやら日常的に使われる言語は英語の方らしい。恐らくそちらの方が客寄せ的に取っ付きやすいからだろうな、と思いながらも、イノセントが先導して店の扉を開いたときだった。

開かれた扉から男が飛び出てきた。驚く俺たち。しかしもつと驚いたのは、その直後のことだ。

「この食い逃げ！」

店内から投げつけられた、金属製の盆。いかにも重たそうだ。それがイノセントの顔面にヒットした。しかも、面ではなく、縁。縦にぶつかったそれはイノセントの顔にめり込んだ。思わずぼかんと見つめてしまったが、それどころではない。「食い逃げ」と言う単語が聞こえた。見れば男も驚いてイノセントの顔面を見ていたようだったが、我を取り戻したように駆け出そうとした。

(させるか！)

俺は男に足払いをかけた——誰にもばれないように、こつそりスキルも使つて。

サイキツクが上乘せされた足払いで、男は強かに転んだ。受け身を取る暇もなく顔面を舗装された道路に叩き付けた。うわ痛そう。他人事のように思いながらも、俺はとりあえず男の上に乗った。逃げられないように。

そのとき、店内から飛び出てきたのはひとりの男性だった。長い黒髪を括った、緑と青のヘテロクロミア。身長は185cmを優に超えている。非常に癪ながら、所謂「イケメン」ではなからうか。イノセントは美少年カテゴリーのためか不思議とあまり腹が立たない。たぶん成熟した男として見ていないためだろう。しかしこの青年は違う。同じ男として腹立たしさを覚えつつも——思い出す。ちよつと待て。そう言えばイノセントは……。

イノセントは顔を押しさえていた。片手には盆。「うう」と小さく唸っている。それはそうだろう。理由は不明だがいきなり顔面に金属製の盆を投げつけられたのだ。それも縁。鼻血どころか鼻を骨折してもおかしくない——

しかし覆っていた手を外した顔は無傷だった。何でだ。ギャグ漫画か。驚く俺に構わずイノセントはぶんすかと怒る。

「ちよつとクロ君！ いくら食い逃げを捕まえるためとはいえ盆を投げつけるとかひどくない!? しかも狙い逸れてるし！ 無実の俺に当たってるし！」

「あーすいませんすいません。お詫びに今日はドリンク一杯サービス

しますよ」

「バターケーキもつけて」

「逆にバターケーキでいいんですか？——と、その前に。そこのお兄さん、食い逃げ犯確保有り難う御座います。今縄持つてくるんです。う少しそのままでもいいもらえますか？」

「はあ……」

言われるがまま、次第に暴れはじめた男をイノセントが乗っかって動きを封じる。彼——クロ君などと呼ばれていた——が縄を持つてきた頃には、人が疎らに集まってきた。呆けている俺に、クロ君とやらは言った。

「マスターが騎士修道会に通報してくれたんで、あとはその人らが連れて行ってくれます。さて、縛りますよ」

「放せー！ 放せー！」

男はなおも暴れていたが、俺たちが抑え付けながら縛り上げ、やって来た人々に引き渡す頃にはすっかり力を落としていた。やって来た人々は、元の世界の修道服であるカソックを騎士風に改造したような制服を見に纏っていた。

俺はそれを見送りながらも、イノセントに耳打ちする。「騎士修道会」とやらが怖かったから、彼らの前で訊くのは憚られたのだ。

「あのさ、イノ……騎士修道会って、『神以外の奇蹟を許さない、それを駆逐する』団体なんだろ？ なんて警察みたいな真似もしてるんだ？」

「ああ、言っただけだったね」

言いながら、イノセントは盆を指でくるくると回した。銀色の縁が陽光に照らされて鈍く光る。

「ボトム教は国教。即ち国民は皆教徒。教徒の安全を守るのも、騎士修道会の役目ってわけ。ほら、『騎士』ってつくでしょ」

「ああ……ところでイノ、この店がひよつとして……」

「おーい、2人とも。店に入ってくれ」

青年が手招きする。店に入ると、小粋なレコードが流れている。コーヒーの苦く豊潤な香りと、菓子甘い香りがした。客は今のところ

ろくない。恐らく先程の食い逃げ犯が「客」だったのだろう。その中で、青年は名乗った。

「俺はクロキ・アガツマ。この喫茶店のウェイターだ。お兄さん……トモヤつつたつけ。1日手伝ってくれるってな。宜しく」

「……？ アキツシマネの人ですか？」

名前の響きが日本人のそれだ。なのでこの世界での日本に相当するのだろうかアキツシマネとやらの出身だろうか。クロキは俺の問いに首を曖昧に振った。

「移民だな。2世だか3世だか……詳しいことは俺は知らないな。姉貴なら何か知ってるかも知れないが」

「知らない？」

自分の家庭事情について曖昧だということがあるだろうか。思わずまだ並んで立っていたイノセントを見遣るが、彼は小さく頭を振るばかりだ。囁いてくる。

『色々あるんだよ』

「イノさんは適当な席についてください。それで、トモヤ。喫茶店の経験はあるか？」

これには頭を振らざるを得ない。大学生時代、1度などは某スターでバックスな店に憧れたこともあるが、俺にはあの呪文のような注文を捌ききれないしそもそも憶えられない。あとカップにこじやれたサインやメッセージとかもできない。要は自分は陽キャではないのだ。辛うじてそれ程陰キャでもない、という点において自分は元の世界で社会生活をそこそこ送っていた。それも限界が近かったが。

それに「それならかえって好都合」とクロキは息を吐いた。

「俺の本業はウェイターと言うより料理スタッフなんだよ。マスターもいるけどマスターはコーヒー担当だし。軽食を作ってコーヒーと一緒にお客様に運ぶのが俺の仕事。本当は軽食作るのに専念したいから、今日は本来の意味でのウェイター役はトモヤに任せた」

「はあ……」

「何、そう難しい仕事じゃないから。見ての通り規模も小さめだし」
言われて店内を見渡す。バーカウンターの周りにテーブル席がい

くつか。イノセントはテーブル席のひとつでのんびりと寛いでいた。確かにいけそうだ。今までに比べれば楽そうな仕事ではないか。俺は心密かに（ここにしようかなあ）と思ったものだった。

現実是非情である。

「ウェイターさん、アイスコーヒーまだー？」

「こっちのフラッペと抹茶クッキーは？」

「カフェオレ随分待つてるんだけど」

「はいはいいただきます」

そのテーブル席にも、イノセントの退出後、昼にはぎつちりと人が詰まった。どうやら人気店らしい。バーカウンターも埋まっている。あれ、この展開酒処ミッシュレでもあったな……そう思いながらもきびきびとコーヒーと軽食を給仕していく。スキルを使うほどの重量ではなかったがそこそこ疲労は蓄積されていく。

昼時を過ぎて客の流れが落ち着いた頃、椅子に腰掛けた俺にクロキが「お疲れ」と何かを差し出して来る。それを受け取って、しげしげと眺めた。包み紙で包まれたそれは――

「飴ですか」

「のど飴だな。ハーブののど飴。声を張り上げて疲れただろ。それ舐めて、夕方までもう一踏ん張りしてくれ」

「はあ……」

言われるまま口に含む。ハーブ、と言っていたがはちみつの味もした。それをころころと舌で転がしながら、「これも商品なんですか？」と尋ねる。クロキはなぜか視線を逸らした。

「あー、まあ商品と言えば商品だな。裏メニューと言うか」

「まあコーヒーに飴は合わないでしょうが……これ美味しいですよ。単品で売ったらどうです」

「まあそれもありかな……」

「……なんかあったんです」

「別に」

クロキは目線を逸らしたままだ。

「ただ、その飴は、あの色ボケお人好し馬鹿が変声期のとくに作って

やったやつだから。なんとなく商品にはしづらいというか」

「色ボケお人好し馬鹿……？」

言われて目を瞬く。色ボケはともかく、お人好し、というのには心当たりがある。

イノセントだ。

あいつのお人好しぶりは、「異世界から来た」などという妄言としか捉えられないだろう言葉を吐いた身元不明の男に衣食住を提供し、こうして職場体験までさせてくれる。生粋のお人好しだ。金持ちゆえの余裕、と言えばそこまでだが。

思えば盆の縁を顔面に強打した辺りのやり取りで、2人の遠慮のなさが窺えた。どういう付き合いなのだろう。あと色ボケってどういうことだ。今は彼女がいるとかみたいなのを言っていたはずだが。気になることは色々あったが。

「少なくとも俺は、その『お人好し』に助けられていますよ」

「それが問題なんだよ。あいつは人を助けることに躊躇を覚えない。それが問題なんだ……」

クロキの声は真剣で、深刻で。俺が何かを答えようとする前に、店の扉が開いた。気が付くと夕暮れだ。

そして、見た。右が青、左が緑のヘテロクロミア。長い黒髪の、美しく淑やかな印象の女性。けれど肉付きのためか、ひどく蠱惑的な印象を受けた。否、それよりも気になるのは。思わず顔を向けた。向けた先はクロキ。

左右が違うと言えど、同じ青と緑のヘテロクロミア。同じ黒髪。何より顔がそっくりだ。俺が思わず見比べていると、女性の方が艶やかに微笑んでこちらに歩み寄ってきた。そして、俺の顎に人差し指を添える。

「あなた、新人さん？ 助かるわ、ウチは人手不足だからね。ところで、夜手伝ってくれる気ない？」

「よ、夜……？？」

「言ってなかったか。ウチの喫茶店、夜にはバーになるんだ」

クロキは言う。

「昼間は喫茶店で、マスターがコーヒー、俺が調理兼ウェイター。夜はバーで、マスターがバーテンダー、こいつ——姉貴がウェイトレスになるんだ。どちらかというところ『ママ』と言った方が近いな」

「夜は夜でお酒の提供が忙しいのよ。あなた、かわいいしあたし好みね。どう？ 夜働かない？」

言いながら、彼女は椅子に座る俺の太股に手を乗せる。顎には指を添えたまま、キスできそうなほどに顔が近い。吐息は蠱惑的なほどに甘かった。

しかし俺は、かなしいかな女性への免疫がなかった。つまり、童貞である。

「す、すすいません。俺、そう言うの駄目で——」

「新しい道を切り開くのも乙なものよ。見たところお酒は飲める年でしょう？ 一緒に仕事を——」

「そこまでだ姉貴。無理強いするな」

そこでクロキが、俺を椅子から立ち上がらせて背後に庇ってくれ。身長180cm越えの男に庇られると、こういうとき心強さを感じる。悔しさも感じるが。彼女は「そう？ 残念」と大してシヨックを受けた様子もなく店の奥へと去っていった。

それを見送った俺は、その時点で決意を固めていた。多分、クロキも一緒だったと思う。

「……クロキさん」

「なんだ。多分俺と言いたいことは一緒だろうが」

「この店でお勤めしている限り、彼女の誘惑は続きますね……？」

「続くな。お前は気に入られたみたいだ」

「……………今日限りでお暇させてもらいます」

「残念だよ」

そう答えるクロキの声は、本当に落胆していた。

いい加減道は憶えた。夕暮れ、喫茶店の店終いののち。ジエマーケット邸へと帰る前に、店の前で頭を下げた。

「今日はお世話になりました」

「ああ、こつちこそ助かった。できればまた、手伝いに来て欲しい。

……姉貴のいないときに」

「はは」

「ああそうそう」

「？」

クロキが思い出したように、俺に近付いてくる。顔が近付いてきて

——耳打ちされた。

『奇蹟』を起こすときは、次はもう少しばれないようにやれよ」

「！」

「俺からの忠告はそれだけだ。それじゃ、イノさんに宜しくな」

俺は返事もできず、ただ再び会釈をして店を立ち去った。

スキルを使うのにもタイミングと、ばれないようにする小細工が必要なようだ。俺はそう学習しながら、丁度迎えに来たらしいイノセントに遭遇した。

「なんだ、待っててくれてよかったのに」

「そう世話にもなつてられないだろ」

そう言つて笑うイノセントはいつも通りだったので、俺は「色ボケ」という点について指摘し損ねた。

そしてこの日は体も慣れたのか、筋肉痛を起こさずに済んだのが最大の幸福だったと記しておく。

Next……

三流銀行行員くインテリヤクザ風味く

中々、これといった仕事が決まらない。しかしイノセントは辛抱強く付き合ってくれるつもりらしい。今日も、「もしかしたらできるかもね」と言つて、昼近くになつてから連れ出してくれた。こいつの人の好きは何なのだろう。家は名門らしいし、これがノブレスオブリージユと言うやつか。そんなことを思いながらついていった先は、建物自体はさして高さはないが、なんとなくオフィス街を彷彿とさせる町並みとなつていった。辺りを見渡しながら、ゆつくりと先導するイノセントに尋ねる。

「この辺りの街ってなんなんだ？　なんか金融関係っぽいけど……」
「お、正解。銀行街だよ。この国は特性上近隣諸国の中でも経済が発達しててね〜」

「ああ、宝石の売買をするからか」
「そ。トモヤもこの国に慣れてきたね」

元の世界で勤務していた会社では資材部に所属していたため、その辺りの流れはなんとなく察することができた。

まだ手持ちには少ない情報しかないが、恐らくこの国の主産業は鉱物業。「ユヴェーラント」（宝石の国）などと言う国名もきつと大袈裟ではないのだろう。そうになると、元の世界の産業革命の時代を彷彿とさせるこの国では既に貨幣経済は成立しているに違いない。そうになると、鉱物は売買の対象。そもそも、俺が拾われたのも鉱山の麓だった。鉱山を開発するにも金が必要だろう。鉱物業がこの国の屋台骨と思われる以上、国からの補償もあるだろう。だが以前本で読んだ「あらゆる移民が働いたためにこの国にやって来た」という記述を思い出すと、基本、その辺りは国民任せなのではないかとも思う。未開地を開拓する意志のある者が集ったわけだから。そうになるとやはり銀行の出番だ。

イノセントは滔々と語る。

「宝石を担保に金を借りたり、鉱山の開発のための融資を受けたり。色々だよ。俺は主に稼いだ金をあちこちの銀行に預けてる」

「あの……」

「お、どうしたの」

俺は不安になった。

銀行員なんてのは、元の世界でもエリート印象が強い。自分はない会社員で、銀行は取引相手だった。なのに、もしかして銀行員の職を幹旋してくれるつもりだろうか。俺が不安になっていると、それを察してか「ああ、大丈夫」と彼は朗らかに笑った。

「俺が紹介したいのは——」

刹那、激しい物音。人と人、人と物がぶつかり合うような音。

見ると、斜め前方。扉がガタガタと揺れたかと思うと、激しい音を立てて開け放たれた。そこから、刺青に刈り上げの男が顔を歪めて出て行こうとしていた。取り纏るのは年配の女性だ。店員らしく制服らしきものを着ている。痩せぎすの彼女は、男に「待ってください」と叫んでいる。彼女に構わず、男は立ち上がった。

「うるせえ、払ってられるか！　こんな三流銀行、潰れちまえ！」

そう叫んで立ち去ろうとする。修羅場じゃないか、と俺はイノセントを見た。

イノセントは、呆れた顔をしていた。

「これ、前にも見たなあ」

とすら呟いている。前にもあったのか、こんなこと。それでも俺が狼狽していると、俺たちの横を通り過ぎたスーツの男性がいた。日本人平均身長俺より小柄な、くすんだ金髪の男性だ。その彼が、何気なくイノセントに何かを手渡した。紙袋だ。

「これ、お願いしますね」

「あ、うん」

イノセントに特段取り乱す様子もない。それにさらに混乱している——男性は、あろうことか、刈り上げの男にドロップキックを放った。背中に直撃。男は俯せに地面を滑っていく。あれ絶対顔面に、主に鼻に擦り傷できろぞ、痛そう。俺がそんなことを考えていると、男性は迷わずつかつかと男に歩み寄る。そして小柄な体で苦もなく、男の襟首を猫の子のように掴み上げた。その間に、先程男と女性

が出て来た扉からばらばらと屈強そうな体を色取り取りのスーツに——平たく言ってちんぴらかヤクザかマフィア——身を包んだ男たちが出て来た。そして猫の子のように摘まれた男の脇を固める。ドロップキックを放った男性の横顔が見えた。眼鏡の、理知的な印象の男性だ。彼は微笑んで言う。完璧な、貼り付けた微笑だった。

「契約は契約です。法律に則った完璧な契約ですよ。そのことを、じっくりと話して聴かせてもらってくださいね」

「は……放せー！ 放せー!!」

暴れる刈り上げの男は、男たちに建物の中へと引きずり込まれていく。これは見送っていいものか、しかし人前でサイキックを使えない以上自分にできることはない。そう思っていると、眼鏡の男性がこちらに歩み寄ってきた。やはり小柄だ。しかし体つきはしっかりしているから体重は俺より重いかも知れない。そんな彼はイノセントに向かっていた。

「俺のお昼、預かってもらって恐縮です。それで今日はお金の引き出しに？」

「あー違う違う。昨日電話で言ったでしょ。ちよつと仕事を見せてあげて欲しい奴がいるって——トモヤ？」

俺は既に察していた。この世界に来て数日、勘は格段に良くなったと思う。その上で、俺は言った。

「もしかして、俺に紹介したい仕事って」

「今みたいな、金を払わずに逃げようとする客をとっつかまえるだけの簡単なお仕事だよ」

「無理です」

「へえ、人員が増えるのは嬉しいですけど」

「無茶です」

「そんな頑なに断らなくても」

「無理なものは無理！」

本来俺は肉体派ではない。サイキックを使えないのでは尚更だ。俺は声高に拒否をしたのだった。

それでも「まあどうせ来たならお茶でもどうぞ」と眼鏡の男は言っ

た。

暴力団事務所に連れてこられた借金持ちの一般人はこんな気持ちだろうか。

男の悲鳴が聞こえたり、泣き声が聞こえたり。人がぶつかると物音も響く。どしんと人が倒れるような音もした。その中で、眼鏡の男は「粗茶ですが」と見るからに安物のカップを俺たちの前に2つ置いた。紅茶のようだ。いやそれよりも異世界なのに、ヨーロッパっぽい世界だろうに「粗茶ですが」と言う文化があるのか。確かに粗茶のようだが。俺が怯えながらも思考を巡らせていると、イノセントは悠悠とカップを手に取った。ところどころ革が剥げたソファに、貴族のように優雅に座っている。

「トモヤ、お茶冷めちやうよ」

「あ、うん……」

「それで、なんでしたっけ。そちらの方が職を求められているとか」

言われるがままにカップを手に取った俺に、正面のソファに座った男が問いかけてくる。紅茶の味はダーズリンに似ていた。男の質問に答えたのはイノセントだ。

「そう。俺の伝手で知ってるところから紹介して回ってるところ。まあここんちの力仕事は駄目だろうなって思ったろうけど、彼、この辺の地理に詳しくないから案内も兼ねてね」

「まあ、銀行なら何れ来ることになったろうけど……あの、ここ、普通の銀行なんですよね？　なんで……その……」

俺がしどろもどろに目線を彷徨わせっていると、眼鏡の男は首を傾げる。そうすると幼い印象を受けた。

「あなた、この国の方ではないんですか」

「ええ、アキツシマネの出身で」

「それならこの国の銀行の特殊事情もご存知ないですか……私からご説明しましょうか」

「お願い」

男の視線がイノセントに向かい、イノセントが肯いた。それで、男はこちらを見た。

「まず、そもそも銀行というものがどういう性質のものかはおご理解いただけてますね」

「……金の貸し借りを請け負う機関でしょう」

「概ね合ってますね。それでこの国の銀行というのは、専ら鉱山開発の融資を承っています。『宝石の国』ですからね。そう言った目的の、大半のお客様はきちんと担保を用意し、厳しい審査を受けた結果融資を受けられて鉱山の開発などに乗り出されます。その後、銀行側にも見返りが来ますね」

「それじゃ、『きちんと』担保を用意できない客は……」

俺が言うと、男は微笑んだ。あの、貼り付けた微笑みだ。俺が内心戦っている、男は淀みない声で言う。

「そう言ったお客様もおられますね。勿論普通ならそう言ったお客様はご融資させられないのですが……当行のような、『審査の緩やかな』銀行もございます。そして、中には先程のように契約を一方的には破棄されるようなお客様もいらっしゃいます」

男は微笑んで言った。完璧な微笑だった。接客業のお手本にしたいくらいだ。

「そう言ったお客様には、『お連れ』して『説得』するのがこの近辺の銀行のスタンスですね」

「や、闇金……」

「闇金とは違うよ、トモヤ」

隣からフォローが入る。イノセントがカップを口から離していた。そのときまた大きな物音がして、震動で天井からパラパラと粉が落ちてきた。

「少なくともこの銀行は、法律の範疇の利子で融資してる。それに、さつき見たでしょ。その上でなお踏み倒そうとする客はろくなものがない。だから行員自ら『説得』するってわけ。ここの行員、見た目怖いの多かったでしょ。ああ言う連中を前にしてぬけぬけと借金を踏み倒そうとするのは大抵太い奴らだからね」

「それにしたって——」

「あら、フランちゃん。こんなところに来ちゃったの？」

女性の声がした。確か、先程「客」に縋り付いていた女性行員の声だ。フランとは誰だろう、そう思っているとはたばたと軽い足音がする。それが近付いてきたかと思うと、パーティーションの向こうから子どもが——子ども？

腰を浮かしたのは眼鏡の男だった。それで、男の仮面が外れた音を聞いた。

「フラン？ どうしたんだ、こんなところに来ちや駄目だろ」

「ヘンリーお兄ちゃん、お仕事頑張ってるかなあつて」

子どもは、少女のようだった。恐らく秋物のワンピースに靴下、革靴。それに肩からはポシエットを斜め掛けしていた。やや痩せた印象の、しかしかわいらしい少女だ。最初、男と父娘かとも思った。しかし彼を——恐らくヘンリーというのは彼の名なのだろう——「お兄ちゃん」と呼んでいる。それに、種類は違えど両者共に金髪だ。この間会ったマグダレーナ姉弟と言い、金髪率が高いなど他人事のように思いながら目の前の光景を成り行きのまま見守っていると、少女は手に持っていた「それ」を眼鏡の男に差し出した。

それは、花だった。野の花をそのまま摘んできた風情の、可愛らしい花束だった。男は目を瞬いている。

「これね、お仕事頑張れるようにお守り！ 公園で摘んできたんだ！」

「——そうか」

男は、その花束を受け取った。

そして、少女の目線に合わせてしゃがみ込む。小さな、丸い頭を撫でた。

「有難う。頑張れるよ。みんなで見られるように受付に飾っておくから」

「うん！」

「それじゃ——いや、今このまま家まで送る。すいません、私ちよつと出て来ます。あ、あとジエマーケット様と、ええと」

少々狼狽えた様子の男に微笑ましさを覚えた。子どもを前にすると人間、本質が出るものだ。その笑みはまだ怯えがあつたので控えつ

つ名乗ることにする。

「マツシタです。トモヤ・マツシタ」

「マツシタ様。少々席を——」

「いや、俺らは帰るよ。邪魔したね。お茶、美味しかったよ」

そう言つて、イノセントはソファから立ち上がった。立ち上がる仕種まで優雅だったので、躡けられたんだろうな、と思いつながら俺は庶民らしく立ち上がった。美味しかった、というのは世辞だろうなと思いつつ。

そのときには、男はフランと呼ばれた少女と手を繋いで出口に向かって行つていた。

この国の銀行の事情について語られたのは、散歩ついでにジエマーケット邸へと遠回りに歩きながらのことだった。

「さつきヘンリーは省いてたけどね。この国で銀行が生き延びるのは中々厳しいことなんだよ」

「そうなのか」

「倒産しそうになったら国が補償してくれるけど、雀の涙だね。鉾山開発の融資を募ると偽って金を借りるだけ借りて高飛びする奴もいるし、易々と貸したはいいけど、焦げ付いて不良債権になることもある。この国じゃ1度そういうことが起きると悲劇にしかならない。で、自然とそう言うのに慎重な銀行が生き延びてきたってわけ」

「……」

「で、審査が緩い銀行って言うのは人が集まるけど、犯罪に結びつくケースも多い。前にも言ったし遭遇したでしょ？ テロリスト。ああ言うのが資金集めに、身辺のキレイな奴を雇って嘘の融資を受けるとっていう例もある。そういうのは逃すと大変だから、行員も武装して取り返しにかかる。そうでなくとも、まあ普段から不屈きな客を逃さずに捕まえて金をびた一文負からず払わせるっていうのが日常業務みたいなもんだしね」

言つてから、イノセントは嘆息した。

「さつきのフランも、そう言う例のひとつでね」

「えっ、どつちっ?」

「テロリストに雇われた方。あ、あの子の父親がね。色々あつて金を持ってテロリストの元に逃げようとして……結局捕まって。体が弱り切っていたから最初は入院したけど、その後は結局刑務所行き。今、フランは父親を待ってるところなんだよ」

「……なんでそれが、その、ヘンリー？　さんのところで？」

「さあ、その辺の事情はよく知らないな。ただ個人的にあの2人は相性が良さそう——ああそうそう、周りからはヘンリーって呼ばれてるけど、あいつの本名はちよつと違うよ」

「へえ、なんて言うんだ」

「ヘンリック・ニルソン」

その名前に、俺は首を傾げた。名前の響きからして東欧か北欧じゃないだろうか。イギリスやイタリア、ドイツを合わせたようなこの国にはあまりしっくり来ない。俺がそう思っているのを察してか、「ああ、ヘンリーは移民なんだ」と答える。

「移民って今でも結構多いよ。ユヴェーラントはその辺寛容だからね。宝石を掘る意志ひとつあればいいみたいなどころあるし」

「そっか……俺は鉱山労働者には向きそうにないが……」

「まあそれは期待してないよ」

「それはそれで腹が立つな……それで、何て言う国からの移民なんだ」俺はこのとき、何となく質問したつもりだった。世間話の一環だ。それに対し、イノセントもやはり世間話に過ぎない調子で答えた。

俺にとって、あまり聞き捨てならない言葉を。

「ヴァナルガンド王国ってところ。『北の地』に近いところだね」

「え——？」

「どうかした？」

俺は口を噤んだ。けれど、それでも取り繕って「何でもない」と答えた。

俺はこのとき、ただ驚いたのだ。

（なんで、俺の世界にもあった国が、そのまま存在しているんだ……？）

N
e
x
t
.
.
.
.
.

疑惑

ヴァナルガンド王国。元の世界では北欧に位置し、神話のフェンリル狼を国教の主神とする、少々異色の国だ。詳しい政治形態などはあまり俺も詳しくないが、立憲君主制と言うことになっており、しかし20世紀〜21世紀初頭の王国では珍しく王室の発言力が強いと聞く。何せ、王室は国教である土着のヴァナルガンド教の宗教指導者。指導者の言うことを聴かざるを得ない。そう言う国であるはずだった。あとはロボット開発が主産業になりつつあったか……。

それと、全く同じ名の国が、この世界にはあるという。俺はそれに疑念を抱いた。抱いたので、イノセントに「ヴァナルガンド王国についての本を貸してくれ」と直球で頼んだ。イノセントは首を傾げながらも快く何冊かの本を選んで貸してくれた。「汚さないでね」と念を押されたがそれだけだ。人が好いにもほどがある。しかし今はそれで助かった。

そしてさらに驚いた。この世界のヴァナルガンド王国も、さして政治形態も、そして土着の国教の宗教指導者が王室であるということも——それらすべてが同一だった。さすがに北欧神話というものはないらしい。しかしフェンリルという、狼の姿をした旧き神がいたという話になっている。違うことと言えば、元の世界は女王と、女王が未婚で産んだ王女がひとりだけいること。こちらの世界は男性の国王に、王子と王女が複数恵まれているということか。

そこで気になることがあった。なので、イノセントに本を返しながら尋ねることにした。本には書かれていなかったことを。

「なあイノ。この……ヴァナルガンド王国って、独自の国教があるんだろ。でもヘンリーみたいなの移民がいるってことは鎖国してるわけでもなさそうだし、近そうだし……それなのにボトム教は『近隣諸国の宗教』として知らしめられている。ヴァナルガンド王国はなんでその影響を受けてないみたいなんだ？」

「あー、これはちよつと事情が複雑でねえ」

言って、本を書架に戻すイノセントは答える。

「ちよつと説明しづらいんだけど、ヴァナルガンド王国は色々近隣諸国に便宜を図ってくれてるんだよ。ヴァナルガンドは寒冷ながら農作物も豊かに採れる国でね。食糧事情はどこも困ることがある。ヴァナルガンドはかゆいところに手が届くようにそう言う国に融通する。そう言う国だから、どの国も——このユヴェーラントも何も言えないってわけ。特にこの国は、食糧自給率に乏しいからね」

「ああ……宝石頼りだもんな」

「正確には鉱物全般だけどね。どつちにしろこの国は畑を開拓するより鉱山を開発する方を優先しちゃうから……大事な商売相手、それを無理にボトム教に改宗しろとか無茶は言えないでしょ」

「まあそれはそうだな。よくわかったよ」

と、口では言ったものの、俺の心の疑惑は晴れなかった。

イギリスやイタリア、ドイツなどの雰囲気に似ているものものそれそのものではない国。しかし、人が集まってできた国——それは、元の世界のアメリカに似ている。

他の国のことはまだわからないが、恐らくアキツシマネは日本に相当する。それ以外の国も、ひよつとして元の世界と似た国々があるのではないか。

——異世界の国が、元の世界の国と似ることはまあある、と言うことは元の世界の本で学んだ。それらは空想のものだが、外れていないのではないかと思う。しかし、ヴァナルガンド王国という元の世界そのままの名と、酷似した形態の国。それに、今自分たちが話している、英語に似た言語。

なんとなく、そう、何となく。胸に疑念の陰を落とした。

それでも、今日も俺はイノセントについていった。

「今回は本屋さんだよ」

それは、今までの職種の中で最も穏当な仕事に聞こえた。てろてろと街を歩いていく中、それでも自分は尋ねる。

「本屋って、こちらの仕事だと力仕事な上に薄給って聴いたけど」

「そつちだとそうなんだね。こつちは本はそこそこ貴重品だから多分ちよつと違うと思うよ」

そう言ってから、イノセントは言葉を切った。

「問題は、それよりも」

「万引き死すべし!!」

かと思えば、斜め前方の店。看板には「Bookstore」とある。本屋だろう。問題は、その扉を突き破るように転がり出て来た男だ。男は手に本を持っている。いかにも貴重そうな文献だ。

そこに、店から出て来る男。眼鏡の奥の緑色の目が理知的だ。問題は、エプロンを身に纏ったその男が明らかな殺意を以て転がり出て来た男の前に立ったことだ。素早くしゃがみ込んで、転がっていた男の胸倉を掴む。

「この間から次々とまあ……ウチの店から本を万引きしようたあふてえ野郎だ。そういう奴には相応なお仕置きが必要だなあ?」

「ヒエヒエ」

と悲鳴を上げたのは、男か、自分か。その間にイノセントは勝手知ったるといふ様子で店内に入り、ロープを持ってきて、眼鏡の男から引つ剥がして男を縛り上げた。それに眼鏡の男は不満そうだ。

「なんだよイノ、俺は今日こそ万引き犯に鉄槌を下そうとな」

「お前の鉄槌は脳挫傷ものだから。それより本を回収しなくていいの?」

「おっと」

言いながら眼鏡の男は、男の下敷きになっていた本を滑り取る。埃を払うと、大事そうに掲げた。

「うん、傷はなし。これでこの子のおうちも決まるね」

「その本に対する愛情を他者にも向けて」

「失礼な。そんなもの、万引き犯にくれてやる気がないだけだよ。それより騎士修道会呼んで。こいつを連れてってもらう」

「もう連絡したよ」

と、中年女性の声があった。見ると、扉の向こうからひとりの女性が出て来ていた。恰幅の良い彼女は、眼鏡の男と同じ緑色の目をしていた。親子だろうか。そう思いながらも、俺は一連の流れを見て、ああ……と察しつつあった。

やがて連絡を受けたらしい騎士修道会の面々が駆けつけてくる。この辺りの担当なのか、1番偉そうな壮年の男性が「毎度のことながら、程々にしてくださいよ」と眼鏡の男に苦言を呈している。それに男は憤慨した。

「なんでですか。万引きは窃盗罪、つまり我々本屋の財産権を侵害する存在。ひいては我々の死活問題。それに対して抵抗したまです。違いますか」

「あーもう本屋は無駄に弁が立つから相手してられない。とにかくこいつは引つ捕らえますから」

そう言つて、彼らは万引き犯を引つ張っていく。それを見送つたのち、イノセントが切り出した。

「それで、サン。この人が俺が連絡した職場体験希望者なんだけど」

「もう帰つて良い?」

「そう言わんと」

「1日手伝つてくれるんだっけ? 助かるよ。俺はサン・スーシィ。

サンでいいよ」

「話を聴いて」

俺の話は誰にも聴いてもらえなかった。

結局、この万引き犯を殴り飛ばした男——サンの店で1日職場体験をすることになった。あの万引き犯が転がり出て来た光景を思い出すと非常に帰りがかったが、先日の銀行でも即座に辞退したし連続で仕事を辞退するのはな……と気が引けたのもあって、結局エプロンを借りた。

少なくともこの国に消防法というものはないらしい。店内は薄暗く、通路は狭い。何より本棚が天井にまで達しており、本棚が壁となって店内を仕切っているようだった。少し埃っぽい。本屋というより古本屋の雰囲気を感じ取ったが、「午後には新刊が来るから荷分け手伝つてね」と言われたので恐らく新書を扱う店なのだろう。そこで俺は疑問を覚えたので質問してみることにした。

「このせか……国って本が貴重品なんじゃないですか? 早々新刊とか来るんですか」

「今日は特別。1ヶ月に1度新刊が取次から送られてくるんだよ。その度に返本したりとかする」

「へえ……」

頷きながら、本棚を見遣る。

見たところ、こちらで言う英語やドイツ語のタイトルの散見された。スペルからしてフランス語だろうか？ というものもある。見上げると「政治経済」と英語で記されたプレートが貼られていた。つまりこのジャンルの本なら無国籍に並べているらしい。いい加減なのか几帳面なのか分からない。とりあえず1冊手にとってみようか、と手を伸ばしたところで頭を軽く叩かれた。

「こら。就業時間中は商品の本を読まない」

「えー」

「買った本なら休み時間にも読んでいいから。それじゃまずは仕事

——埃叩き！ はいハタキ」

「はあい……」

ハタキをくれるぐらいならマスクもくれないだろうか、と思いつながら俺は「向こうの端から叩いてきて」という指示通り、ハタキを片手に店の奥へと移動した。そして、本棚の数の多さにうんざりした。

(これを半分とはいえハタキをかけろと……?)

俺は軽く絶望しながら、しかし社畜精神が発揮され、「ひたすらやっていたらいつかは終わる」と念仏を唱えながらハタキをかけたのだ。た。

30分後、そこには本棚を見上げながらハタキをかけたためにやや腰を傷め、目に埃が入った俺と、慣れた様子のサンがいた。ぐしぐしと目を擦っている中、サンは感動した様子でこちらを見ていた。何かやらかしただろうか。そう思っていると、サンは嬉しそうに言う。「何度かバイト入れたけど、こんなに丁寧な仕事をしてくれたのは君が初めてだよ。アキツシマネの人って仕事丁寧なのかな？」

「ああ、ある意味国民性ではありますね……1部、『社畜』と言う偏った国民性ではあります」

後半の台詞は口の中で消えた。ハタキをサンに渡しながらもごも

ごと口籠もる。サンはよくわかっていなさそうな様子ながらも、笑った。先程阿修羅の如く万引き犯を追い詰めた男と同一人物とは思えないほど爽やかな笑顔だった。

「国民性つてき、その国の人が余所の国で取った行動の証みたいなものじゃん。仕事が丁寧って言うのは、誇って良いことだと思うよ」

——それは、元の世界では決して言われなかった台詞。少なくとも、俺には。

それで、何となく。何となく、少しだけ救われた気がした。元の世界で、無為なほどに頑張っていた自分が。

「……有り難う御座います」

俺は、その言葉に、ただ礼を言うことしかできなかった。

それで、俺は決めたのだ。この世界に定住しよう。

人が人を救う言葉を与えてくれる、優しさのあるこの世界に。

たとえ疑念があったとしても。

その後、怒濤の量の新刊が入荷し、荷分け（本の内容の分野ごとに仕分ける作業だと聴いた）に一苦労して再び腰を傷めそうになり、本屋に就職することは諦めたが。

N e x t

インターロード

それは連日の職場体験の合間の休日。喫茶店の客としては行くのにすっかり慣れたフエブラリーで、俺はカフェモカを、同行していたイノセントがはちみつカフェオレを喫していたときのことだ。

からんからん、軽やかな鈴の音を鳴らして入ってくる人物。顔を上げると、出入り口の扉から少女が入って来ていた。鮮やかな赤毛に茶色の目。イノセントと大して年の頃は変わらなそうだ。そんな彼女が、難しい顔をしてこちらに歩み寄ってくる。正確には、その褐色の目はイノセントの白くて丸い頭を見ていた。

そして、近くにまで寄ってくると——彼の頭を驚掴みにした。

「わっ、なに?」

「イノ、用事がある。来てくれる?」

「あのさ、用事があるなら普通に話しかけてくれるかな……? 俺たち人間には言葉というものがあるんだよ……?」

その光景を眺めながら、俺は思った。イノセントは、その類い希な美貌に反して周囲からの扱いは割と雑だな、と。顔面に鉄製の盆の縁をぶち当てられても鼻血ひとつ出さなかった頑丈さのせいもあるだろう。俺がそう思いながらぼんやりと見ていると、立ち上がり伝票を手にしたイノセントは「何してんの」と俺に声をかけてくる。俺は目を瞬いた。

「お前もついてくるんだよ、トモヤ」

「なんで」

「今思い出したけどこれも職場体験の一環になるかな。まああまり仕事の内容は明かされないとと思うけど——アコウ、いいよね」

「よくわからんが……まあ、ガルシアが良いって言ったら。噂で今身元不明者の職探しをやってるって聞いてたけど本当だったんだな」

「お世話になってます……」

俺は申し訳なさも感じたが、とりあえず次の職場案内をしてもらえらるなら有難いことはない。急いでコーヒーを飲み終わると、イノセン

トが当たり前のように勘定を払って店を辞した。

ひと言で言うと、彼女と彼女の養父が行っているというのは「探偵」だった。

とは言っても、推理モノにありがちな、迷宮入りしかねない事件を見事解決するとかそういうものではなく、ペット捜しや浮気調査、失踪者の捜索。そういうモノらしい。

ついてきたのはいいものの、煙草の匂いが染みついた部屋。革張りのソファでちよこんと座っている間にもイノセントは何やら衝立の向こうで誰かと話し合っている。その間に、席に着いていた俺に茶が饗された。この間の銀行のときのようなものではなく、それなりに質の良さそうなティーカップだ。それを丁寧に持ち上げて啜ると、アツサムに近い風味がした。一口呷ってソーサーに置くと、俺は思い切つて尋ねてみることにした。できるだけ小声で。

「それで、イノは何の用件で呼び出されたんですか……?」

「依頼人のプライバシーに関わるのでお答えはできませんね」

「ですよね」

「ただ、まあ言えるのは、イノは悪くない。運が悪かった、つてところですね」

「ふうん……?」

要領を得ないが、とりあえずイノセントは無事に帰してもらえそう。既に大事な恩人であるし、あと彼に今いなくなれるとこの世界での拠点を失ってしまう。双子の弟のアダマスは、「余剰品」の人間を家に置いていくほど寛容には見えなかった。改めて自分の立場の危うさを感じながら再び紅茶を啜ったところで、アコウは恐る恐ると言った様子でこちらに囁きかけてきた。先程の俺より余程小さい声で。

「それで、その……こちらからもお訊きしたいことがあるんですけど」「何でしょう」

「……あなたの起こす『奇蹟』は、アキツシマネだと普通なんですか?」

「……!」

どこだ。どこで漏れた。思わず席を立ちそうになると「落ち着いて

ください」と宥められる。そしてアコウは言った。

「我々は探偵ですからね。正確には私は助手ですけど。色々情報源があるんですよ」

「どうかそのことは永久に伏せておいてくださいね……」

「まあそうしても構いませんけど……公開火炙りとか見たくないですし」

その言葉を聞いてゾツとする。火刑に処されることもあるのか。そう思いながらも怯えていると、アコウは重ねて問いかけてくる。

「あなたの『奇蹟』って、物を動かすことなんですか」

「まあ、そうですね」

「それだけですか」

「それだけですわね」

「そっかあ……」

アコウは嘆息した。そして、言う。

「記憶操作とか、心の傷を癒やすとか、そういうのがあればよかったんですけど」

「それは、ちょっと難しいんじゃないかな」

俺は思わずタメ口を聴いた。アコウが顔を向けてくる。

「奇蹟って言うのがどうなのかは詳しいことはわからないけど、きっと心に作用することはとても難しいことだと思う。だって、心は人の最後の砦だから」

「――」

「だから、奇蹟とやらに頼らず、自分でどうにかするしかないんだよ。立ち直るのは、結局自分ひとりの力だから。……説教臭くてゴメンね」

「……いいえ」

アコウは、頭を振った。優しい、諦観に満ちた微笑だった。

「いえ、わかっていたことです。有り難う御座います」

「おーい、話終わったよー。帰るよトモヤ」

「ご協力感謝する」

衝立の向こうから、イノセントがてろてろと歩いてくる。その背後

から、ぬつと男が出て来た。黒髪に碧眼の大男だ。恐らく彼がガルシア、と言う男なのだろう。苦勞しているのだろうか、眉間の皺が深い。そんな彼は、アコウの肩を抱いた。そして俺に言う。

「アコウから、探偵についての仕事は少しは聴いてもらえたかな」

「あ、はい」

大凡嘘だったがとりあえず肯いておいた。どうせここで肯定しても否定してもこの男は何も教えてはくれまい。なぜかそういう直感が働いたから。そして俺の言葉に、ガルシアは笑んだ。太い笑みだった。アコウの肩を掴む手に力がこもったのを、俺は確かに見た。

「そうか。やる気があつたら、起業するのは手伝うぞ。まあそれからライバル同士になるがな」

「はは、考えておきます」

——恐らく、探偵の仕事というのは人のプライバシーを探る仕事。それを思うと、自身のメンタリテイでは保ちそうにないな、と思った。そしてそれよりも気になったのは、この「父娘」の距離感だった。俺はイノセントについていきながらも、最後まで振り返り振り返り、2人の姿を見送った。

「面食らったでしょ」

探偵事務所を出てきつかり10歩歩いた先。そこでイノセントが言う。それに自身は首を傾げる。

「ええと、どれに？」

「ガルシアとアコウの距離感」

「ああ……父親と娘にしては近くなって思った。特にアコウっていう子、あの子お前ぐらいの年だろ。あの頃なら難しいんじゃないかな、色々。反抗期とか思春期とか」

「あの2人は義理の父娘だからね、その辺難しいんじゃないかな。色々」

それを聴いて驚いた。仲がいいと思ったわけだ。しかし、その回想に違和感を覚える。

なんとなく、そう、なんとなく。距離感が近すぎると思った。

俺の懸念に、イノセントは嘆息混じりに言う。

「あの2人の行く末がメリーバッドエンドじゃないといいけど」

——彼は、どこまで、何を知っているのだろう。

俺はそう思いながら、次の職場体験について思いを馳せた。

書類を手にしたガルシアが言う。

「今回の案件は俺ひとりで片付けられるな。留守番を頼む」

「そう。わかった」

そう言っつて、アコウはガルシアの手に両手を回す。

そして、口づけをした。

口を離すと、ガルシアは幼子を宥めるように彼女の頭を撫でた。

「良い子に待っている。相手をしてやるから」

「うん」

「——次の案件は、子どもが虐待されている可能性がある。早く行ってやらないと」

そう言う、ガルシアの目は剣呑なものになる。

その目を、アコウは知っていた。

彼女の実の両親を殺したガルシアは、きつとこういう目をしていった。

——けれども、憎む気になれない。アコウはそう思う。

彼は彼なりに、アコウを救おうとしたのだ。それがわかっていたから、それを飲み下す。

それでも思うのだ。ガルシアを苦しめる「何か」を消してやれたらと。

けれどそれは叶うことがなかった。

Next……

暗雲

その日の朝、イノセントはやや緊張した面持ちだった。

「トモヤ。今日は騎士修道会に顔出しに行くよ」

「えっ……なんで」

顔を洗って身支度を調べていた俺に、真剣な面持ちのイノセントに尋ねる。彼は既に衣服を改めていた。いつもよりかっちりした服装だ。赤い、恐らくシルクのリボンタイをつけている。ここでそう言えばこいつは良いところのボンボンだったと思いがしたが、俺の服装はどうすればいいのだろう。そう思っていると、それを察知したように「トモヤは最初に着てたスーツでいいよ」と教えてくれる。そして続けた。

「騎士修道会……正確には教祖の現人神現当主と顔合わせしとかないといけないんだ。この国に入った人間は。祝福を授けてもらうためにね」

「こつちで言う洗礼みたいなの？」

「センレイがどういうものかはわからないけど、多分一緒だね。とにかく今日はそこに行くから。ついでに騎士修道会の職場体験もさせてもらうっ！」

「それは遠慮しておく」

即座に拒否したのは、自身のスキルのためだ。

事前に聴いていた通り、騎士修道会は異端狩りという血で綴られた言葉で彩られているという。モンスターや魔女、吸血鬼、人狼など幻想種の類は2千年前に駆逐されたらしい。尤も今でも魔女狩りが定期的に行われているらしいから完全に駆逐しきれているわけではないらしいが。

さて、そう言えばなぜそのことが民衆に知られているのか。少なくともイノセントは知っているのか——答えは簡単だった。尋ねた俺に、イノセントは容易に答えた。

『見せしめだよ。異端のお前らが下手に出て来ると狩られるぞって言う、そういう話』

それで、騎士修道会の「本気」を感じた。

——そして、この世界では異端とされるスキルを持った自分が、敵の本拠地に乗り込むことになる。それが恐ろしかった。

服を着替えながらも、俺はおどおどした。

「大丈夫かな……?」

「まあ、今のところ、俺の把握できている限りだと『異端』が祝福において露見したことはないよ。飽くまで俺の把握している限りだと」

「不安が増した」

「まあどうせこの国で暮らす以上避けて通れないことだし、先延ばしにしてると余計怪しまれるよ。ここは腹を括って行こう。——ああそうそう、忘れ物はしないようにね」

「忘れ物?」

そう言つて、イノセントは俺に籠を渡してきた。何やらずつしり重い。揺れるとちやぶん、と水音がした。——水?」

「着替え終わったね。それじゃ行こうか」

「あの、その前に朝食は」

「今日は教会に着いてからね。食べさせてもらえるから」

そう言つて、イノセントは先導して屋敷を出た。それに俺は黙つてついていくしかなかった。

異世界でも、相似することがあるのだろうか。雑誌やテレビ、ネット媒体で見た「教会」にその建物はよく似ていた。バチカン市国のそれが一番似ているだろうか。俺が呆けていると、イノセントは俺の袖を引つ張つた。

「ほら、トモヤ。こつちで記帳して」

そこは教会に付属していると思しき建物だった。壮麗な建物に対してやや不釣り合いな、事務的な印象を覚える建造物。そこに足を踏み入れると、やはり事務所的な印象の内装。その中で受付嬢と思しき女性が机を挟んで座っている。女性はシスター服を動きやすく改造したような制服を見に纏っていた。彼女の前で辿々しいながらも英語で名前を記す俺。それに彼女が眉を顰めたような印象を受けたが、自身は応える術もない。「現人神様に謁見したいのですけど」とイノ

セントは気軽に言う。そして、彼女も気軽に「少々お待ちください」と応えた。いいのか。そういうのつてもっと細々した手続きがあるものじゃないのか。俺がそう思っていた矢先、女性に戻ってきた。

「現人神様はお会いになるそうです。どうぞ、こちらへ」

俺はその言葉に息を飲む。遂に、この国——それどころかこの国近隣一帯を支配下に置く宗教の教祖に見える。なのに、先導するイノセントはごくいつも通りだった。

礼拝堂を思わせる、長椅子に囲まれた天井の高い空間。赤いカーペットを敷かれたそこを歩いていくと、ひな壇のようなスペースが見えてきた。

傍らには、癖毛の長い黒髪の男性。年齢はわからないが、自分と同じ日本人に見えた——つまり、恐らくアキツシマネの縁者。それに自身の正体が露見するのではないかと冷や汗を覚えながらも、それよりもっとプレツシャーを覚えるべき相手が目の前にいた。

段が重なった先。その一番上で、少女が——そう、少女だ。精々18歳かそこらの——座していた。玉座のようなそこで鎮座する彼女は、やや明るい赭色の長い髪をしていた。伏せ気味の目の色は遠目にはよくわからない——とにかくそんな彼女は、「祝福か」と平板な声で言う。彼女は問うてきた。

「名は」

「トモヤ・マツシタと言います」

「故郷は」

「……アキツシマネです」

「ふむ、そうか」

背いた彼女に、自身はどうすればいいかわからない。そこで隣から、イノセントが囁きかけてきた。

『その持ってきた籠の中身が供物だから、それを捧げて。 // 祝福をお与えください』 “つて”

『あ、うん』

言われるがまま、籠を持っていく。それを男が受け取った。男は段を上り、彼女の元へと捧げた。それと同時に、手で祈る。

「どうか、祝福をお与えください」

「うん。わかった」

そう言って、彼女は籠を膝に乗せた。

そして俺は目を瞪る。籠の中に入っていたのは、透明なガラスの瓶——ひよつとして、中身は水か？ 否、それよりも問題がある。

籠に入っていたのは、石だ。岩と言った方が近いかも知れない。重かったはずだ。俺が内心で狼狽えていたが、彼女は構った様子はない。ついでにイノセントも。途惑う俺に構わず、彼女はまず瓶を手に取り——その中身が、見る間に赤く染まったのを見た。あれは、ワインレッド。

「……?!」

驚く間もなく、彼女は岩を手取る。それは彼女が掴むと——パンに変じた。

「……?!」

待て、これは聴いたことがある。これは——元の世界で「彼の人」が起こした奇蹟だ。

驚く俺に、彼女は段を下りてきて、思わず跪いた俺に、籠にパンと瓶を戻して渡してきた。

「あなたに祝福がありますよう」

渡してきたはずだった。その足が、最後の段に蹴躓いた。

「にっ」

「当主様！」

立ち上がった男の声。そのときには、彼女は倒れ込んでいた——俺の体の上に。籠はなんとか俺が片手で受け取って無事だった。恐らく彼女も無事だろう。彼女が大した重さではなくてよかったな、と女性に対して失礼なことを考えていると、もぞもぞと彼女は動いた。そして俺の胸の前で目を瞬いていた。彼女の目はやや明るいオリーブグリーンをしていた。彼女は言う。

「吃驚したあ、またやっちゃったよ。ゴメンね、えーと、マツシタさん。祝福は確かに授けたから」

「はあ……」

「当主様！ そろそろ立ち上がってください」

そう言つて男は彼女の体を引つ剥がす。その扱いがやや雑だったので、本当にこれが近隣諸国の宗教の教祖として崇められている当主なのか……？ と疑念を覚えた。ぽかんとしながらも座り込んだままの俺に、イノセントが手を貸してくれる。

「アーリヤ——アリランはだいたいいつもこんな感じだよ。イマイチ決まらないんだよね」

「イノ、聞こえたよ」

「イノセントさん、不敬ですよ」

玉座に戻つた彼女はむくれていたし、男は不機嫌そうだった。

教会を出て来て。教会の近くの広場でベンチを見つけた俺は、イノセントと並んで座つた。

籠の中には確かにパンが入っており、水が入っていたと思しき瓶のコルク栓を軽く引き抜くと上質な赤ワインの豊潤な香りがした。

パンに齧り付くと、酵母菌が仕事したと思しき酸っぱいような風味がした。バターの香りも豊かで、自分が乳製品アレルギーでなくてよかったな、と思う。それよりもあの行程で何が起きたのか。まさに奇蹟としか言いようがない。朝食を摂れなかつた分がつつとパンに齧り付いていると、イノセントは微笑ましいものを見る目をしていった。

「そんなに美味しい？ 俺が食べたの遙か昔だからもう覚えてないんだよね」

「お前も祝福を授けられたのか」

「当時の現人神からね。今は孫娘に跡目を譲つて現役を引退されてるけど」

「というかそれつてもしかして子どものうちにワインも授けられたのか」

「当時はコップ一杯だったけどね、さすがに。大人は瓶1本くれるよ」

「そっか……とここでさ、イノ」

「なに？」

「俺、酒弱いんだよね」

「えっ」

「だからワイン一本飲み終わるまでに確実に潰れてるから、残りは屋敷に帰ってからでいいかな」

「ああ……この調子だと今日は職場体験は——」

「あれ、イノじゃん」

不意にかかる男の声。先程の黒髪の男とは別の、明るい声だ。しかし、自分の直感には、どこか殺伐とした雰囲気があるな、と背中越しにも感じた。振り向く。

そこには金色の目をした男が立っていた。身長はイノセントと変わらないそう。まだ若そうで、多分俺より年下だ。イノセントの友人だろうか。そう思っていると、イノセントはこちらを向いた。そして俺を示しながら男に言う。

「やつほロビン。紹介するよトモヤ、こいつがボトム教騎士修道会の現会長。ロバート・グッドフェロー」

「ロビンかロブって呼んでくれ」

「えっ、こんな若そうなのに……?」

「まあ実際若いよ。僕22歳だし」

言いながら男——ロバートは頭を掻く。照れ隠し、と言うには少しすれている雰囲気があった。

「前の会長が亡くなったあとで誰もなり手がいなくて。偶々僕が1番腕っ節が強かったからなっちゃったって感じだね」

「え、騎士修道会ってそう言う……?」

「決まってるじゃん」

答えたのはイノセントだ。

「大事な大事な現人神様を守るのには腕っ節の強い奴が1番偉いに決まってるでしょ」

「イノの言う通り。尤も王立騎士団みたいに剣術だけが推奨されてるわけじゃなくて、得物は人それぞれなんだけどね。真つ当に剣を使う奴もいれば弓もいるし銃もいるしハルバートもいるし、何ならスコップもいる。身分も問わないし。信仰心があればそれでいいって感じ」

そう言つて、ロバートはごちらにずい、と顔を寄せてきた。

「それで君、噂には聞いてたけど今職探ししてるんだつて？ どう？
ウチに入らない？ ウチなら王立騎士団みたいに分身や身元に煩
いこと言わないよ」

「あー……」

言われて、俺は一瞬考える。

腕っ節は強くない。スキルを使うのはここでは以ての外だ。ついでに、「無宗教」と言われる日本という国で生まれ育った身としては、宗教というものにもアレルギーがあつて。

俺は気が付くと、籠を持ったまま諸手を広げていた。

「すいません、考えておきますね」

「本当にね、考えておいてね。まあ他に職が決まったら無理強いはしないけど……それじゃ、僕はこれで」

「それじゃまたねー」

ロバートはそう言つと、手を振つて教会のある方へと歩み去つていった。

それを見送りながら、俺は彼についての所感を小声で述べる。

「何て言うか……陰がある感じの人だったな」

「間違つてないと思うよ」

イノセントはやはり小声で囁いた。

「ロビンの出自には謎が多いんだよね。そもそもどこから来たかもわかんない。あと気付いたらルーデと付き合つてたし」

「ルーデつて」

「俺の彼女の姉。酒処ミシユレで職場体験したとき客として来たんでしょ。そのとき会わなかつた？」

言われて思い出す。そう言えばルーデと呼ばれた女性がいた。アッシュブロンドの長い金髪の——美女。

俺は瓶を握り潰しそうになった。

「いい女には男がいるっ……！」

「どうどう、落ち着いて。何したつて現実には変わりはないんだから」
落ち着かせようとするイノセントの言葉は逆効果で。俺は屋敷に

戻ってからワインをラツパ飲みして自棄酒することとなる。

一方、残された現人神——アリランは思い返していた。
縛れ込んだ先にいた、あのマツシタという青年。

彼からは、何かしらの「力」を感じた。

(……あたしは構わないけど……修道会にはれないといいな)
「当主様？」

「何でもないよ、サクラ」

アリランは努めて穏やかに微笑んだ。

自分の立場をよくわかつていたから。

N e x t

蠢動

「さて」

と、イノセントは、俺の部屋に宛がわれた椅子の上で手を組んだ。ゲ●ドウポーズだなと俺が思っていると、イノセントは顔に見合わない低音を更に低めて言った。

「そろそろ俺が紹介できる職場も数えるほどになってきました」

「寧ろ今までこれだけだったひとりで紹介してくれたことの方に驚いてる。まだあるんだ？」

「あとひとつか2つかってところだね。それでひとつ目の方だけど……こっちは1日体験と言わず1週間ぐらい泊まり込みでお願いしたい。向こうからのたつての要望だよ」

「えっ、何するんだ」

「話は簡単」

イノセントは言った。

「メシスタントだね」

「は？」

イノセントに連れて行かれた先。そこはごく普通の一軒家に見えた。家全体が黒檀で作られているのではないかと思うほど黒く塗装されていること以外は。ドアノッカーを叩くイノセントの後ろで、鞆を抱えた俺は途惑う。

「なあ、メシスタントって言われたけど、要はそれってアシスタントの飯を作る担当版ってところなんだろ？俺、大して作れるわけじゃ……」

「レシピがあればなんとかなるんでしょ？それなら大丈夫大丈夫、それに多少焦げてようが生焼けてようが気にしない大雑把な舌の人だから」

「で、何してる人なんだ」

「ああ、それは——お、ヤンジャック先生。今日は大人しく出て来られましたね」

「……誰だ……」

出て来た男は、またもや大男だった。この国だとひよつとして大柄な男性が標準体型なのかも知れない。黒髪をオールバックにしており、小さな双眸は紫色。スラックスにカッターシャツというところまではごく平均的な服装だったが、纏っている白衣が絵の具だらけなことが彼が芸術方面の仕事あるいは趣味であることを示していた。画家だろうか。この強面の男性がキャンバスに向かっていている姿は様になりそうだった。

しかしイノセントは、思わぬ発言をする。

「電話かけたら、仕事があるって言ったでしょ。絵本作家のイソップ・ヤンジャック先生——もといイーヴォ・イツテンバッハ」

「え、絵本作家？」

「意外だったか？」

そう言つて男——イーヴォは含み笑う。どうやら自身が堅気に見えない自覚に富んでいるらしい。慌てて諸手を振つて誤魔化す自身に「まあいい」と鷹揚に許してきた。

「それで彼が、イノ。お前の言つてた『メシスタント』か」

「×切まであと1週間、飯支度してくれる人です。トモヤ、挨拶」

「あ、はい。トモヤ・マツシタって言います」

「——アキツシマネか？ フランチェスカからの移民か？」

「えーと、アキツシマネからの直接の移民ですな」

と言うことにしておいている。やや目を泳がせたが、イーヴォは構った様子はない。彼は「まあいい」と背中を向けた。手招きしてくる。入れ、ということらしい。イノセントの方を見ると、こちらも手を振っていた。

「1週間契約だから、ちゃんと最終日にはお給料をもらってくるんだよ」

「うん」

「しつかりしてるな……——ところで、飯だけ作るという契約だが」

扉を閉めたあと、ついていく。……廊下に本が積まれていた。

リビングらしき部屋に入ると、そこは物が乱雑に置かれており、本棚の周りには本棚に入りきらなかったと思しき書籍が積まれていた。

台所に回ってみても、なぜか本が諸処に積まれていた。

「これを片付けてくれてもいいんだぞ」

「いえ。俺の仕事は『食事を作ること』らしいので。ところで寝泊まりすることになるらしいですけど、寝床はどちらに？」

「ちえっ……寝室なら客間がある。そこ風呂だけは片付けてるから安心して寝てくれ。タオルも自由に使っていていい。さて、早速だけ何か作ってくれ」

「昼食ですね」

言いながら、冷蔵庫を開いた。

俺としては警戒していた。空っぽ、もしくは傷んだ食材が並んでいるのではないかと。

しかし、意外なほど野菜室も冷蔵庫も整理されていた。リビングの惨状が信じられないほどに。そんな俺の思考を読んだように、イーヴォがリビングの椅子から声をかけてきた。

「意外ときれいにしてるだろ、冷蔵庫は。普段は偶に自炊するんだ。忙しくなると近所の喫茶店からデリバリーしてもらうがな。簡単なものでいいぞ。とりあえずサラダだけでいい」

「はあ……それじゃ頑張りますね。えーっと何があるかな……」

言われて、冷蔵庫を漁る。サラダ、サラダ……スープも欲しいな……。あ、ブロッコリーがある。ミニトマトもあるな。お、トウモロコシと……こっちは棚にはタマネギも……。

一通り漁ったところで、メニューが決まった。鞆から持ち込んできたエプロンを身に纏う——包丁を手にした。

出来上がったのは2品だった。盆に乗せて、イーヴォの座る席の前に差し出す。

「ブロッコリーと卵のサラダと、コーンポタージュです」

「随分早かったな」

「これは俺の元いたせか……国でも作ってたものだったので」

サラダと言われて、本を開くまでもなかった。ポタージュスープも。社畜生活で疲れ果て、できるだけ胃に優しい且つ作りやすいものを……とインターネットで検索した結果がこのメニューだった。思

わぬ郷愁を抱きながら突っ立っていると、サラダを頬張っていたイーヴオが言う。

「それで君の分は？」

「え？ ああ、俺はまたあとで——」

「どうせなら、次からは2人で食べよう。確かに×切1週間前だが、食事はゆっくり摂るつもりだから。どうせならひとりより2人がいい」
そう言っつて、しやりしやりとサラダを美味しそうに食べるイーヴオに、俺は内心で感動していた。

確かに、この世界に来てからは、ジエマーケット邸でイノセントやアダマスと共に食事を摂っている。豪華な食事も慣れてきてしまった。なぜか、健在なはずの両親が出て来ないことに疑問を感じていたが——それはともかく。

俺としては、この何てことのない食事で、誰かと一緒に食べるというところが、随分久しぶりに感じられた。

それで思い出したのは、実家のこと。

——ガチガチな家だった。良い思い出より悪い思い出の方が色濃い。

けれど、その僅かな「良い思い出」が、心に引っ掛かった。

「どうした？」

「いえ」

それでも、俺は飲み込んだ。

——俺は、この世界で生きていこうと決めたのだ。あの世界ではかけてもらえなかった、優しい言葉のために。

(けれど、別れの言葉ぐらいいは言いたかったかも知れない)

俺の胸に、後悔の澱が、僅かに積もった。

それを払拭するように俺は尋ねる。

「ところで俺、あなたの描かれる作品がどういうものか存じ上げないんですが……」

「え？ 何も知らない奴寄越したのか、イノの奴。まあその辺にある『イソップ・ヤンジャック』名義の奴は全部俺の本だから、暇な時に読めよ。ほら、これとかこれとか」

食事を中座して、その辺りに積んでいた本を拾い上げたイーヴォはそれを手渡してくる。絵本だから薄い。そして表紙は柔らかい色合いをしていた。成程、絵も文章も彼が作っているらしい。それに感嘆しながらも、俺は本を捲った――

そして数冊を読み終えた頃、ゆつくりと食事をしていたイーヴォも御馳走様、と挨拶した。そんな彼に、俺は思わず小声で囁く。

「ちよつと……いいんですか、こんなこと描いて」

「ん？ お前も反対派か？」

そう答えるイーヴォは慣れた様子だった。しかし俺としては看過できなかった。

それは、元の世界では有り触れた題材だったかも知れない。けれど、この世界ではまずいのではないのか。

魔女、狼男、吸血鬼、妖精、巨人、竜。他にもそれ以外の幻想種を題材にした絵本というのは。

「反対派というか……騎士修道会に睨まれてませんか？ この『犬と魔法使い』はシリーズものつてことは人気があるんでしょうが……」

「勿論睨まれてる」

「なら」

「けどな、トモヤ。文字書きなんてのはな、反体制的でなんぼなんだよ」

「……」

言いたいことはわかる。わかるが、それでも少しは我が身を省みた方がいいのかも知れない――尤も、サイキックなどというスキルを持つ自身が言えたことではないが。

さて、そこで何かしら油断したのか。自身は「お皿片付けますね」と立ち上がった。そのとき、テーブルに足をぶつけた。同時にイーヴォもぶつけたらしい。皿が浮いて、テーブルから飛び出した。

そのときだ。咄嗟に――スキルを使ってしまった。

『浮けー！』

果たして、念じた通りに皿は浮いた。そしてふわふわと、フローリングに軟着陸する。ホツとしたのも束の間。はたと気付いた。恐る

恐るそちらを見遣る。

イーヴォは自身と、床に「下りた」皿を交互に見遣っていた。そして、言う。その目は輝いていた。テーブル越しに俺の肩を掴んでくる。

「お前……お前、『魔女』か!?!」

「え? そ、それは違いますね……」

「ならその力はなんだ? ああ、また俺は出会えたのか……!」

イーヴォは恍惚とした顔で、俺を見つめていた。

「あの日俺を救ってくれた『魔女』に!」

Next……

困惑

俺が早足で歩いてくると、イノセントの姿が見えた。門前でアツシユブロンドのベリーショートの女性と話している。あれは例のカノジヨだろう。しかし今はそれに嫉妬という思考すら避けない。

足音に気付いたらしい。イノセントがこちらを見た。そして首を傾げる。

「あれ、トモヤ。お前、イーヴォんちでの仕事は？」

それに俺は早口で答える。

「それなんだけど通いでやらせてもらうことになったから」

「まあいいけど……面倒臭くない？ 特に朝食」

「元のせか……国での仕事で早起きと徹夜には慣れてるから」

「あんた軍人かなんかだったのか？」

女性が思わず、という様子で口を挟んでくる。ある意味では合っているかも知れない。サラリーマンは企業戦士、と呼ばれた時代もあった。しかしそんな、誇りを持った時代の人間ではなかった。俺は嗤った。

「勤め先の家畜みたいなものだったかな」

「家畜はきちんと睡眠取ってるぞ」

言われて、肯く。

「成る程。前の俺は家畜以下だったわけだ……」

「何があったんだよ……」

「ま、まあとにかくトモヤは家の中に入ろう。マリーア、また明日ね」
「おお……」

カノジヨを見送ると、イノセントは俺の背中を押す。そして囁いた。

「なにかあった？」

「……あつたつちやあつた」

「俺に話せるやつ？」

「まあ……話していいんだろうな……どうせお前にはばれてることだし……ただ……」

「ただ？」

敷石を踏んでいき、玄関の扉の前。そこで俺は囁いた。

「……—短い付き合いだけど、お前のことは信用してる。だから、下手なことは吹聴して回らないだろ？」

「つまり大つぴらには話せないことなんだね。いいよ、部屋に行こう」

「お帰りなさいませトモヤ様、イノセント坊ちやま」

扉を開くと、メイドやフットマンが駆けつけてくる。それを先に回り込んだイノセントがあしらって、俺を彼の自室へと誘導した。

『魔女』？』

「——って、イーヴォは言ってた」

メイドに淹れてもらった紅茶を啜りながら、俺は語る。

イツテンバツハ家で起きたことを。

『魔女って……騎士修道会に駆逐されたんじや』

途惑う俺に、イーヴォは少しだけ興奮が醒めた様子で言った。

『そこまで聴いてるなら、今でも定期的に“肅正”が行われているのも知ってるだろ。つまりまだ細々と魔女やモンスターも生きてる。少なくとも、俺はどちらにも遭遇した』

『え——？』

困惑する俺に、イーヴォは真剣な面差しで言った。

『お前がどういう経緯でその力を手に入れたのか。今、思わず使ってしまった、という様子ならまだ使いこなせてないんだろ？ しかも前はどう見ても成人を過ぎてる。と言うことは、後天的に何らかの事情でその力を手に入れた——違うか』

『……』

『沈黙は肯定と見なす。——その力について、知りたいことはないか』

『え』

イーヴォは言った。

『この国にも、まだまだ開拓されていない土地がある。地平線の果てまで荒野の続く場所もある。深い森もある。広い広い湖もある。—

—そこに、魔女はいた』

『……』

『驚いたよ。それより俺は先にモンスターに襲われた。襲われたところを——魔女が、なにかしたんだろうな。モンスターは倒れて、魔女がその死体を浮かせて運んでいった。俺はそれについていったよ。命の恩人だったからな。魔女は困った様子だったけど、結局家に招き入れてくれた。そのときに、教えてもらったんだよ』

イーヴォは息を吸った。

『“奇蹟を起こすのはボトム家の人間だけじゃない”って』

』

『驚いたよ。俺はその時点でボトム家に祝福を受けていた。現人神一族が住むメツカの国の民として誇り高いものを抱いていた。だから、それはシヨックという言葉じゃ表しきれなかった……』

『……』

『それから俺は、“もう帰りなさい”って言われて、気付いたら最寄りの宿泊街付近で佇んでいた。それで親に発見されたけど……俺は、あのとときの魔女のことで頭がいっぱいだった。あの“目”を持った魔女のことが』

『目？』

『邪眼、邪視、あるいは魔眼と呼ばれるものだろうな。伝承では。とにかく——トモヤ。お前、その力について知りたいことはないか』

そう言われて、俺は一瞬、考え込んだ。

この世界にいるという現人神、同じように奇蹟を起こすという魔女。そして、自身をこの世界に移させた女神。3人の女性がいる。そして、次に恐らく会えるとしたらその魔女だろう。

気になっていることがある。この世界に来て、ちくちくと自分を叩んでいたことだ。

それでも、即応しかねた。

『考えさせてください』

それで、俺はイツテンバッハ家を辞してきたのだ。

一連の話を聴いたあとの、イノセントの言葉は至ってシンプルだった。

「で、結局、魔女に会いたい？」

「——それは……」

「迷ってるなら会いに行つた方が早いんじゃない？」

「でも、下手に会いに行つたら……その魔女に迷惑じゃ」

「ああ、見つかるかもか」

答えながら、イノセントはしばし顎に手を添えていた。しかしそれは一瞬のこと。

「よし決めた。それじゃトモヤ、仕事はちゃんと1週間終えて来てね。それで終わったら俺に教えて」

そう言つて、イノセントは俺の肩を叩いた。繊細な顔に、人を安堵させる笑みを乗せて。「俺も手伝うから」

そう言われて1週間。通いで食事を作り続けた。食事は俺と一緒に摂るといふ約束だったし、日が経つにつれ徐々に会話も増えた。イノセント以外にできた、秘密を共有できる友人ができたかな、と思つた。

そして1週間後。×切を迎えたイーヴォはふらふらと俺に給料を渡すと、そのままベッドに倒れ込んだ。俺はおまけとして次の日の朝食を用意して冷蔵庫に入れておくと、ジェマーケット邸に帰った。

仕事が終わつた旨を告げると、イノセントは言つた。

「よし。旅行の準備しよう。必要なものはこれから買いそろえに行こうね」

「へ？」

「その魔女の住処がどこかわかんないけど、何の目的もなく下手にうろろしてると修道会に目を付けられる可能性があるからね」

「そう言うわけでイーヴォ！ 目的地まで俺も含めて旅行しよう！

俺の三輪トラックで！」

×切空けの爆睡から目覚めたイーヴォは、寝ぼけ眼で——しかし視線はしっかりと俺とイノセントを見据えて言つた。

「イノも知ってたのか、お前のその……」

「俺に『その力は使つたらまずい』って教えてくれたのイノなんだ」
「成る程」

イーヴォは苦笑した。

「メ切空け祝いつてことで、ふらふら3人で旅行するか——俺も目的地は曖昧だからな」

「よっしゃ！ 男3人旅！ あ、ちなみに3輪トラックだからひとりだけ乗ってね。言っておくけどこの国の運転免許持ってるの俺だけだよ」

「……」

「……」

「じゃーんけーん」

「それじゃ出発は明日。それまでに荷造りして、どっちが荷台に乗るか決めておいてね」

イーヴォが去っていく。俺たちはしばらくあいこが続いたが、最終的に所用で戻ってきたイーセントに「ああそう言えばイーヴォの方が大きいね。イーヴォ荷台に乗って」と無慈悲な最後通牒がされることになる。

Next……

探索、探検、そして

ガソリンスタンドで給油して(ガソリンスタンドがこの世界にあったことに驚いたが、車もそこそこ走っているしそもそも元の世界でも20世紀初頭にはあったらしいから不思議ではないだろう)、ついでにタンクにもいくつか詰めて、いざや男3人旅出発。

免許というものがあるのだから道交法もあるのだろう、とは当たりを付けていた。その通りで、軽トラあるいはそれに類するトラックの荷台に人が乗るのは基本的に禁じられている。乗って良いのは、荷台に載せた荷物が飛び出たりしないように抑えておく人員だ。今回の3人旅につき、当初は1番大柄なイーヴォが荷台に乗ることになっていた、が。俺ははたと気付いた。

「例の、魔女だっけ。その人がいた地域を案内できるのってイーヴォだけじゃん」

そういうわけで俺は今、助手席にすし詰めになっているイーヴォに代わり、3人の旅の荷物とガソリンタンクの番をしながら旅の空を眺めている。青空は、元の世界の煤けた都会の空とは比ぶべくもなく高く澄んでいた。目的地までそれなりに時間がかかると言われて雨を心配していたが、その目的地まで大きく崩れることがなかった。ほっとした。小振りに降ってきたときはスキルを使って雨粒をカットし続けたので事なきを得た。大振りでもカットはできただろうが、合羽も被らず荷物にシートも敷かず雨の中荷台に座り続ける男は不審そのものだろう。それらの用意はあったものの、揺れる荷台の上でそういう作業をするのはしんどかったので助かった。

朝に首都のエーデルシュタインを出て来て、ぶっ通しで街道を走り続けて、昼に食事を済ませてついでにトイレ休憩という名の立ち小便も済ませて、その辺境に辿り着いたのは夕方。車から降りたイノセントとイーヴォ。荷台から荷物を下ろしながら俺は尋ねる。

「ここがそうだったのか、イーヴォ」

「両親に電話して確かめたからここでもいいはずだ。『俺が行方不明になった旅行先はどこだった。大人になったから友人とまた確かめに

行ってみたいんだが』と聴いたら教えてくれた」

「まあ妥当な言い訳だね。とりあえず宿を探そう。宿あるんだよね？」

「潰れてなければあるはずだ」

言いながらイノセントとイーヴオがそれぞれの荷物を担いで歩いていく。俺はと言えばこつそりスキルを使いながら自分の荷物とガソリンタンクを携えた。こつそり使う分には何ら問題がないようだとこの世界に来てから学んだことだ。見た目より力持ち、ということにしておけば問題が出ない。

しかし——ふと、思う。俺はこの能力を使って異世界で無双することを願った。しかし転移された世界は異能を振るえば結果として死に至る世界。

果たして女神は、本当に故意に送り込んだのだろうか。……俺の選択を黙ったままだったのは事実だが。

「おーいトモヤー、宿取れたよー」

「3人一部屋だぞー」

「あ、うん」

俺は思考の海から脱すると、荷物を抱えて小走りに駆け出した。

俺は気付かなかった。俺のスキルは飽くまでサイキックであり、外に作用する力。だから、自分を「視」つめて来る存在に。

「それ」は、アキギリ色の目で、俺を見ていた。

『ふうむ。これは久し振りに面白いのが来たの』

宿で一泊。ここからは歩いて探索だ。ガソリンタンクと大半の荷物は宿に預けていき、外に出ようとしたときだ。受付の、宿の女将と思しき女性から囁かれた。

「あの……お客さん方。あなた方もモンスター見たさで来たのかい」

「まあそんなところですね」

それに人好きのする美少年のイノセントが笑顔で対応する。それに女性は頬を緩めかけたが、直ぐに顔を引き締める。

「あんまり悪いことは言わないよ。ここまでは騎士修道会も対応しきれないところがあるからね……こつちから縄張りに入らなければ向

こうからは来ないからなんとかなってるけど。あんたらも行くのは構わないけど、こつちに連れてこないようにね」

それは「何があっても見殺しにするからな」という宣言に聞こえたが、イノセントは笑顔で「そうですね、気を付けます」と締め括った。慣れている。多分場数が違うんだろう。イーヴォは「おい行くぞ」と地図を片手に俺に言った。

——そして1時間。

俺は思わず呟いた。

「行けども行けども、荒野だね……」

「湖や森もあるって聴いたんだけどな。実際そうだったし」

「それイーヴォの記憶違いって可能性ない？」

「正直自信ない。小さい頃の話だし」

「おいイーヴォ」

地図を広げたままわいわいと歩いていく。イノセントとイーヴォが揉めている中、ふと、俺は気付いた。

——木と水の匂いがする。

「イーヴォ、森、近いかも」

「マジか」

「あ、本当だ。匂いする。鼻の良い俺より先に気付くなんて、イーヴォ、五感強化のスキルも授かってるん」

じゃ、という言葉尻は消えた。

俺たちが視線を合わせて遠くを見つめた先。そこは確かに霧の彼方だったが、森のように見えた。

そこから、何かが出て来た。——獣の匂いがする。

それに思わず鼻を摘んだ先。俺たちは見た。

人面獅子——それはゲームなどで散々見たモンスターだった。

「マンティコアだ……!」

「えっ、何それ」

「イノが知らんのも無理はない。結構マイナーなモンスターだからな

——森に棲むという話は本当だったんだな。で、どうする」
「どうするって」

顔を見合わせる。その間に、マンティコアが襲いかかってきた——
(今なら人目がない!)

俺は咄嗟に前に出た。

『潰れるー!』

念じると、その通りにマンティコアの体は地に伏し、そしてぐしやぐしやと体が潰れていった。自分でやらせといてなんだがグロテスクにも程がある。赤い血と臓物が地面に広がった。思わず背後でイノセントとイーヴオが身を引いたのがわかったので、この力が改めてこの世界で行使してはいけないものだど理解する。

いや、それよりも今は障害が排除されたことを祝うべきだろう。俺は振り向いて「さ、森に行こう」と話を振ろうとした。

振った先の2人は青ざめた顔をしていた。

「トモヤ、前!」

「!」

振り返らずに『退け』と手を払う。そして改めて振り返ると、もう1頭のマンティコアが轢き潰れていた。しかも、森からはぞろぞろとマンティコアが出て来る。これは、まずい。俺ひとりならともかく、イノセントとイーヴオがいる。彼らを連れて逃げられるだろうか——それでもなんとかせねばならない。俺が意を決してマンティコアの群れに立ち向かったときだ。

『そこまでになさい。私の可愛いしもべたち』

——声がした。

それは正確には声ではない。空気を震わせるものではなく、脳みそに直接届いてくる、テレパシー。狼狽える俺たちに対し、マンティコアたちは従順に地に伏した。それに驚いていると、声はさらに届く。『私への客人かしら? 特にその、アキツシマネ系と思しきあなた。不思議な力を持っているわね』

「あの、俺は……」

『いらっしやい。1頭、マンティコアをつけてあげる。案内してくれるわ。安心して、襲ったりしない。そもそもあなたの力なら容易く殺せるでしょうけど』

「……彼らは友人なんです、彼らは」

立ちすくんでいたイノセントとイーヴオを示す。それに、「声」は拒絶した。

『興味があるのはあなただけよ。異能の力を持つあなた。そちらの……大柄な殿方は、昔助けたわね。覚えてる?』

それにイーヴオは喜色を示した。

「あ、はい。あの、俺、お礼を言いたくて」

『礼なんていいのよ。済んだことだもの。それとそちらの白髪の坊やは……特にないわね。ただ』

「ただ?」

声は、笑い含んでいた。

『良いお友達に逢えたわね、あなた』

「……?」

『とにかく、招くのはあなただけ。お入り。大して時間はかけないつもりだから、その2人はそこで待っていて』

「はあ……」

「それじゃ、トモヤ。気を付けて行ってこいよ」

「うん」

何がなんだかわからない。そう思いながら、マンティコアの1頭に先導されながら歩いていくと、森の奥。ログハウスのような小さな家が見えた。森の向こうには湖が見える。木と水の匂いがここから来ているのだろう。そう思いながら、マンティコアが座った家の前。階段を登り、扉を叩いた。

「どうぞ」

テレパシーの声が、今度は耳から直に聞こえた。それに緊張の面持ちをしながらも、扉を開いた。

——香の匂いがたゆたう。薬品棚が、台所が見える。その中で、安楽椅子に腰掛けた女性がいた。服は、この世界で見られる産業革命の頃の英国人女性貴族のものに見えた。年の頃は20代か、若く見える40代か定かでない。しかし美しかった。きつとこの美貌なら王妃の座も狙えそうだ。そんなことを考えていると、彼女は微笑んだ。

「おかけなさい」

彼女は続けて言った。

「女神様から、あなたに言付かっていることがあります」

N e x t

真相、そして

最初、彼女が何を言っているのかわからなかった。

「女神様って……」

「この世界を真に統べられているお方のことです。あなたもお会いしたのでしょうか？ この『世界』に来られたときに——先程、あなたがここに来られたときにスキルを持っているのに気付いて、女神様にお伺いを立てたのです。そうしたら、あなたの話を聴かせてもらいました」

「そ、そんな気軽に話せるものなんです……？ あなたは魔女、と聴いていましたが、それに関係が……？」

俺の言葉に、彼女は憂うような表情をする。しかしそれは一瞬だった。

「確かに私は魔女と呼ばれる存在ですね。ですが、どちらかと言えば巫女に近いかも知れません。魔女は悪魔の言葉を聞く、とこの世界では言われていますが、正確には人外の者の言葉を聞くと言った方が正しい。私の場合、少しばかり聴ける範囲が広がったというだけですよ」

その言葉に硬いものを感じて、俺は頭を掻いた。

「ええと、すいません。多分、お気に障るようなこと言いましたかね。それなら謝ります」

「素直な殿方はかわいらしいですね。いいえ、あなたは何も悪いことは言っていないません」

そして、彼女は言った。

「あなたは『氷の時代』以前の方ですからね。その頃の価値観の魔女と少々違うのかも知れませんか」

「——待ってください、今、なんと？」

聞き捨てならない台詞が聞こえた。

「『氷の時代』とは、どういうものなんですか……？」

彼女は律儀に答えた。

「長く永く、氷雪が空や地を覆う時代がその昔あったそうです。地域

によって気温差はあったそうですが……その氷の時代の前にあった文明はほぼ途絶えました。中には王室の血統と国を連綿と続けた国もありましたが——聴きませんでしたか？ ヴァナルガンド王国がそのひとつです。あの国には氷の時代以前の知識や技術などが遺っているのですが……それはともかく、氷の時代によって、私たち人類の文明はほとんどが再構築を余儀なくされました。その氷の時代間に動物が進化したモンスターなども生まれ、環境への適応力の高い人間が亜人種の先祖となり、奇蹟を起こす人間が産まれたり……氷の時代は嘗ての文明を奪いましたが、代わりに新たな文明を与えてくれました。尤も、それも全てが良かった、という訳ではないのでしようがね」

長い説明だった。しかし、その言葉が染み渡る間に、理解したことがある。

氷の時代。それは、氷河期だ。

そして、彼女は言った。

『あなたは『氷の時代』以前の方ですからね』

それは、つまり。

俺の口から、言葉が突いて出た。

「つまり……俺は異世界にやって来たのではない。俺は、時間転移をしたということですか……？ それも、恐らく、1万年以上の時間を超えて」

彼女は黙っていた。黙って、戸棚の奥から何かを取り出す。

テーブルに置かれた、それは水晶玉だった。よく見ると中で乳白色の煙のようなものがたゆたっている。この国は宝石が名産と聴くが、こんなものまで産出されているのか？ そう疑問に思う俺に、彼女は言った。

「女神様からの言付けはこうです。『選ぶのなら、この玉たまに手を触れてください』と」

そう言われて、俺は迷った。けれど、それも一瞬だった。

手を翳してから尋ねる。

「痛くないですよね」

「痛くはないですよ」

彼女は微笑んだ。俺は手を触れた。

——途端、未知の感覚が全身を包む。

「ただちよつと、魂が抜ける感覚がするだけです」

その言葉に抗議する前に、俺の意識は遠退いた。

そして、やって来たのは既に懐かしく感じる、あの真つ白い空間だった。

そこに、あの女神は佇んでいた。

『どうもお。色々あったみたいですねえ』

「やい！ 女神！ 何で俺をあの世界——いや、時代に行かせた?! ついでに異世界に行かせるとか言つてなかったか!?!」

俺の抗議に、女神は相変わらず食えない顔をして笑っている。

『そうですねえ、異世界じゃない、という疑問に関しては……何を以て、あなたは“世界”を定義しています?』

「は? そりゃ、並行世界とか……」

『そうですね。それもひとつの定義でしょう。けれど、こういう定義もあります。それは社会生活。それがまるで違うものも、また異世界と言えるでしょう』

「……苦しくない? その定義」

『まあぶつちやけ私がそう定義しているだけの話ですね。本当にあなたの仰有るような並行世界に転生者や転移者を行かせることもあるんですよ?』

そう言う女神に、俺は尋ねた。1番、聴きたかったことだ。

「じゃあ、何で俺はあの時代——世界に行かせたんだ」

尋ねると、彼女はきよとんと目を瞬いた。そして、言う。

『あなたの名前の、“友哉”というのがあるでしょう。これに従っただけですよ』

「は?」

『“友”が“はじめ”。私があのと行き先を調べた中で、あなたが最初に友を得られそうところが、あなたが行った世界なんですよ——』

「逢ったでしょう?」友」と

確かに、逢った。あれは、もう友と呼んで良いだろう。短い付き合いのはずだが、もう長いこと一緒にいる気がする。数は少ないがこちらが助けて、向こうにも助けてもらって（こちらの方が数が遙かに多い）。こうして、ここまでついてきてもらった。

その理由を、彼はこう言った。

『困ってたじゃん。困ってる人を助けるのは、当然のことですよ』

——確かに、得難い友だ。

そして、俺はそこで迷ってしまう。その迷いを見透かしたように、女神は言った。

『あなたのその名前は、元の世界の親御さんがつけたものですね。あなたに、友に恵まれるように、と』

「……」

『たとえばどれだけ悪い思い出があっても、それだけは真実ですよ』

「……」

『どうします? ぶっちゃけこちらの手違いみたいなものでこちらに来てしまった。今からでもあなたを元の世界に戻せますよ』

「——元の世界に」

それに、顔を上げる。女神は垂れ目を細めて語る。

『時間を戻して事故に遭わないようにする。それぐらいの歴史修正は誤差の範疇です。元々死ぬはずじゃなかったんですし』

女神は話す。

『——元々、そのスキルがなくてもあなたは彼の少年と友人になれました。元の世界に戻っても、特典としてスキルは与えたままでもいいです。でも、今ならなくても生きていけるんじゃないですか? さて、どうします?』

随分悩んだと思う。数時間とも、数十時間ともかかった気がする。けれど女神は辛抱強く俺の返事を待った。

そして、俺はようやくやく、答えを出せた。

「俺は——」

N
e
x
t
.
.
.
.

めでたし、めでたし

この世界に来てから新調したスーツ。それを着ながら書類を捲る。羊皮紙でないことが幸いだったな、と思う。氷河期以前の技術が失われていなかったことに感謝した。

俺は、今や主人であり社長代理となったアダマスを前にして報告する。

「〇〇鉱山からルビーが30kg採掘されたそうです」

「その選別をしないと……」[×] 鉱山のジルコンはどうだ」

「あれは研磨したところ無色でよく輝きました。ハイタイプです。ダイヤの代替品として売り出せるかと」

「そうか。……この短期間によくそこまでやってくれた」

黒檀の机を前にしたアダマスは、その机の色によく似た黒髪を揺らして微笑む。

「君はホワイトカラーの人間なんだな」

「はは……どうにもやはりこちらが天職のようで。でもお休みももらえるし給料ももらえるし病気休暇も有給も産休もあるから最高です」
「何を言ってるいるんだ。そんなもの常識だろう」

それを聴いて、俺は内心で苦笑する。

ああ、自分はだからこそ――

「アダマス、アダム。いるかな」

聞き慣れない声がした。年配の男性の声だ。俺が振り向くと、男性が立っていた。半白の、初老の男性だ。目を瞬いていると、アダマスが席を立つ。

「これは、父様」

「えっ」

「はは、挨拶に寄っただけだよ。偶には、一応名目上はこの家の当主だからね。様子を見に来ないと。――そちらが、ひよつとしてイノセントが連れてきたというアキツシマネの新人かな？」

「は、トモヤ・マツシタと言います」

どうやら、顔を出してこなかったジェマーケット兄弟の父親らし

い。頭を下げると、彼は「うん、元気がよいようだなにより」と言う。「有能だというのは聴いているよ。よく働いてくれているとも。でも、偶には休むんだよ」

「はっ……」

「それじゃアダム、私は妻を見舞うからこれで失礼するよ」

そう言つて、扉を閉めていった。遠離る足音。それが聞こえなくなった頃、俺は尋ねた。

「ご両親共に、お体を……?」

「……元々の強いというわけではなかった。母は特に、僕たち双子を變則的に無理して産んだから産後の肥立ちが悪くてね。父は元々だ」

「だから、あなたがお店の采配をなさっていると」

「なんだ。両親の不在を良いことに実権を握っていると思つたか?」

「いえそんな」

「ま、周りにはそう思われても構わん。ただ僕は、この家を潰すわけにいかない。そう思っているだけだ」

その言葉を聞いて、俺は思う。ああ、イノセント。お前はきつと、これを望んでいた。

誰かひとりでも多く、この誤解されやすい弟の味方をつけてやりた
いと。

アダマスは書類を整えた。

「それではトモヤ。そろそろ昼だろう。休憩に入れ」

「は、わかりました。それでは失礼します」

外に出る。都会と言えど、元の世界に比べて澄んだ空気。それを胸
いっぱい吸い込んだところで、背中を叩かれた。

「よっ、トモヤ」

「ごぶつ?! ちよ、なにするイノ……イノセント坊ちやま」

声の主を言い当てたが、振り向いた先で言い当てられた本人は不服
そうだ。

「俺のこと坊ちやまって呼ばないでよ」

「ですが、もう俺はこのジエマーケット家の従業員で——」

「でも、俺とお前は友達だろ。2人きりのときぐらい呼び捨てでいいって。それに敬語もやめて」

「……わかったよ。しょうがないな、イノは」

俺は苦笑する。イノセントは嬉しそうに笑った。けれど、不意にそれが翳る。

「ねえトモヤ。本当によかったの?」

「何が」

「トモヤは言ったよね。元の世界に戻れたかも知れないって。でも、トモヤは結局こっちに戻ってきた。あのときは『こっちで暮らすことにしたから。世話になる』って言ったただけだったけど……結局、何が決め手だったの? こっちで生きるって決めたのは。その……スキルはそのままなんですよ」

「まあな」

「危険な世界だよ。それでもまだ生きていくってどういうの?」

それに、俺は笑った。

「ああ。俺はこの世界で生きていく」

——俺は決めたのだ。

確かに、俺の名を与えてくれた両親は、俺の幸福を願ってくれたことだろう。悪人なんていなかった。ただ、色々な巡り合わせの結果、俺はあの世界で押し潰されそうになっていた。俺は、そこから脱出する方法がもう「死」以外なかった。

しかし、「死」以外に、あの世界を脱出する方法があった。それがこの異世界転移——否、時間渡航だった。だから、俺はそれを選んだ。繰り返し返す。前の世界に悪人などいなかった。けれどその社会の仕組みは、俺を押し潰すには充分だった。元の世界に戻っても、それはきつと同じだっただろう。社会も、親も。

だから、俺は帰らないことにした。

そういう思考は口にせず、俺は微笑んだ。

「スキルも、この世界で単身でやって来た俺が自分を助けるために使う機会もあるだろ。折角異世界に来たんだ。そう言うスリルもありだろ」

「トモヤ、随分なんというか……いやなんでもない」

イノセントは呆れたように嘆息した。けれど、それも暗いものではなかった。

この友人は、俺が異端審問の危機に今なお瀕していることを心配してくれているのだろう。けれど、そんなスリルもありではないか。俺はこのところそう思うのだ。そんな中でばれないように無双する――無双する場所と意味を己で考えるのも楽しいのではないかと。

俺は腕組みをして息を吐く。今日の昼食はフェブラリーで摂ろうか。そう考えながら、ふと、あることを思い出す。なので、尋ねた。「イノ、そういや確か今の仕事に正式に就く前……イーヴォのメシスタントの仕事を割り振る前に言ってたよな。『あと仕事は1つか2つ紹介できる』って。ひとつはメシスタントの仕事だったわけだけど、結局残り1つってなんだったんだ?」

「ああ」

イノセントは何でもないように、逆に問い返してきた。

「トモヤ、お前泳げる?」

「え? まあ人並みには……」

「じゃあ丁度良かったかもね」

そう答えてから、イノセントは言った。

「天然真珠の採取の仕事だったんだけど」

「待て待て待て、そんな過酷な仕事を俺に振るつもりだったのか!?

確かあれって素潜りでどこにあるとも知れない真珠貝から真珠を探す仕事だったよな!?! 俺の身が保たなかったよそんなん!!」

「サイキック持ちならそれもなんとかなるかなあつて……」

「ならない! ならないから! 本当ここに仕事決めてよかった!

と言うか養殖真珠って概念はないの?!」

「あるにはあるけど天然真珠は天然真珠で需要あるんだよ。今からでも行く?」

「行かない!!」

身振り手振りで拒絶を示した俺。そして肩で息をする俺に、イノセントは口元に手を当てた。ぷ、と噴き出す。

「そこまで嫌がると思わなかった」

「嫌がるに決まってるだろ！ ……まあ、他に仕事がなくて、イノ。お前が喰うに困るってなったら、そのときは働いてやってもいいけどな」

「大丈夫だよ。俺は大丈夫。俺はこの手さえあればなんとかなるから。それにしても、トモヤ」

イノセントは微笑んだ。

「今、お前は幸せ？」

「——前の世界よりはな」

俺は笑って応えた。

これにて、終幕。

End.